



Title	3. 融合の可能性についての具体的考察
Author(s)	松本, 秀人; Matsumoto, Hideto
Description	第I部: 本論: 観光と図書館の融合について. 第3章
Relation	観光と図書館の融合 = The fusion of tourism and libraries
Citation	CATS 叢書, 5, 28-80
Issue Date	2010-07-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/43219">https://hdl.handle.net/2115/43219</a>
Rights	© 2010 松本秀人
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS05_004.pdf



## 第3章 融合の可能性についての具体的考察

### 1 本章の説明

#### 1-1 概要

本章において、観光と図書館の融合の可能性について具体的な考察を行う。考察にあたっては図書館の側に軸足を置き、図書館の様々な要素や機能、図書館と地域社会との関わりなどから、観光とどのように融合する可能性があるかについて、参考事例などを含めて考察する。その際、考察をするだけでなく、融合のあり方や具体的な方法などに関する提案も適宜含める。

また、たんに項目を列挙するだけではわかりにくいので、分類方針を設定し、関連するとみられるものはまとめるなどにより、項目の分類と整理を試みる。これにより、項目の位置づけや項目どうしの関連が把握しやすくなり、融合の目的や効果についてもイメージしやすくなると考えたからである。

各項目の説明にあたって、基本的な記述構造は以下とした。

- (1)説明 :その項目に関する基本的な説明。必要に応じて用語や概念も説明した。
- (2)参考事例 :融合を検討するにあたって参考になるとと思われる事例。
- (3)分析 :融合の可能性や効果などについての分析および考察。
- (4)備考 :補記、特記、課題の指摘など。

※参照すべき項目がある場合は、「(→A-2-1)」などにより参照先を示す。

#### 1-2 分類方針について

項目の分類にあたっては、以下を基本方針とする。

まず大分類として、図書館自体が持つ要素に着目し、「図書館の基本的な要素との関連」という項目をたてた。これをさらに「資料」、「サービス」、「施設」に分類し、それぞれに属すると思われるものを仕分けする。

次の大分類として、図書館が地域住民のための社会教育施設であることから、図書館をとりまく地域社会との関連に着目し、「地域社会との関連」という項目をたてた。これは、こんにちの観光も地域との関係が重視されるようになってきていることに対応している。この項目をさらに「まちづくりとの関連」、まちづくり以外の「様々な連携」、より広く地域との関連でとらえた「交流の場としての図書館」に分類する。

次の大分類として、昨今のインターネットの発達においては、地域社会のみならず広くインターネットとの関連も重要になるので、これに着目して「インターネットの発達との関連」という項目をたてた。これはこんにちの観光もインターネットの発達を考慮せずにいられない状況に対応している。この項目をさらに、まず図書館が行っている資料のデジタル化について「デジタル・アーカイブズによる情報提供」としてまとめ、次に「情報発信の多様化」についてまとめ、さらに「ネットコミュニティの影響」としてまとめる。

最後に、これまでの分類におさめにくいものを「その他」として扱う。これには「図書館への視察・見学」と「図書館とツアー」が含まれる。

なお、見出し番号については、参照時に本章の分類項目であることを判別しやすくするため、大分類番号をそれぞれ、A、B、C、D、とし、中分類以下を枝番号で付与する。

項目一覧表は表3-1にまとめる。また大分類項目間の関係イメージを図3-1で示すこととする。

### 1-3 参考事例について

観光と図書館の融合を考察するうえで参考になると思われる事例を、『図書館年鑑』、新聞、雑誌、HP、メールマガジン、ブログなどから筆者の判断により採集した。また、直接図書館へ取材したものや図書館アンケートの回答なども含んでいる。

ここで紹介した参考事例は、その当事者は特に「観光」あるいは「観光との融合」を意識していないものがほとんどである。しかし、それゆえ「観光との融合」というこれまでになかった視点からそれらを再検討することによって、まったく別の効果や可能性が見えてくることに意義があると考えられる。

なお、事例中の図書館名は、自治体合併などで変更になっている場合に、参考文献などとの整合性を保つため旧名のままとしたものもある。

表 3-1 項目一覧表

<b>A 図書館の基本的な要素との関連</b>
A-1 資料
A-1-1 地域資料
A-1-2 地域テーマに沿った蔵書
A-1-3 コレクション・文庫
A-1-4 資料全体との関連
A-2 サービス
A-2-1 レファレンスサービス
A-2-2 イベント・行事
A-2-3 様々なサービスとの関連
A-3 施設
A-3-1 設計やデザインの効果
A-3-2 複合施設の効果
<b>B 地域社会との関連</b>
B-1 まちづくりとの連携
B-2 様々な連携
B-3 交流の場としての図書館
<b>C インターネットの発達との関連</b>
C-1 デジタル・アーカイブズによる情報提供
C-2 情報発信の多様化
C-3 ネットコミュニティの影響
<b>D その他</b>
D-1 図書館への視察・見学
D-2 図書館とツアー



図 3-1 大分類項目間の関係イメージ

## 2 分類別にみた各項目の説明と分析

### (A) 図書館の基本的な要素との関連

まず、図書館の基本的な要素である「資料」、「サービス」、「施設」それぞれについて、観光と融合しうるどのような可能性が秘められているのかを考察する。

#### (A-1) 資料

図書館の最も基本的な要素は所蔵されている資料である。では図書館の資料は、どのように観光と融合する可能性があるだろうか。これについては、以下にあげる様々な観点からの考察が必要である。

まず、前述したように、こんにちの観光にとって「地域」がひとつのキーワードになっていることを考慮すると、地域のことを知るのに適当な資料が図書館にあるかどうか、それらは他では入手しづらいものかどうか、を確認しなければならない。そうした資料がもし訪問地の図書館にあれば、観光者の地域への理解が深まり、観光体験も豊かなものになると考えられる。

次に、それぞれの図書館が置かれた地域の特性や文化を反映した蔵書構成がみられるかどうかについて、確認をしなければならない。このような「地域性を反映した蔵書」があれば、観光者は、図書館の書架を通じて地域文化を実感したり、蔵書によって多くを得ることができる。

さらに、図書館の資料が何らかのオリジナリティを持つことがあるかどうかを確認したい。他の図書館にないユニークな資料を所蔵することは、その図書館の個性と魅力を高めることにつながり、観光対象にもなりうる可能性を秘めていると考えられるからである。

そして最後に、「地域」や「ユニークさ」という視点を越えて、図書館の資料を総体としてとらえた場合に、観光とどのような融合の可能性があるかについても考察をしておく必要がある。これは図書館の利用方法やサービスなどとも関連するので、「資料」という分類のみにとどまらない内容になるが、本研究では便宜上「資料」の分類に含めて考察する。

これらをもう一度まとめると、次の四つの問いを検討する必要がある。

- ①地域のことを知るために役立つ資料には、どのようなものがあるか。
- ②蔵書が地域文化を反映することはあるだろうか。
- ③他の図書館にはないユニークな資料を所蔵するケースがあるか。
- ④図書館の資料全体でみて、観光と融合する可能性があるか。

## (A-1-1) 地域資料

### (1) 説明

まず、「地域のことを知るために役立つ資料には、どのようなものがあるか」という問題意識に基づいて考えてみよう。

図書館の資料は、そのほとんどが「普通に市販されている図書」というイメージがあるが、実際には、各館において、なかなか通常では入手しにくい地域独自の資料を多く所蔵している。これを「地域資料」(あるいは「郷土資料」)といい、主な種別としては、①地域に関する資料および情報、②地域で発行・発信された資料および情報、③地域の在住者・出身者が発行・発信した資料および情報、④地域に関連のある資料および情報、⑤特別コレクション、などがある<sup>(1)</sup>。

地域資料の具体的な例をあげると、地方出版物(図書や雑誌)、地方紙、コミュニティ誌、地図、行政資料などであるが、図書館によっては地域に関するポスター、絵はがき、新聞の切り抜き、折り込み広告、小冊子、NPOやボランティア団体の活動記録などを収集しているところもある。また地域に関する点字資料、写真、マイクロフィルム、16mmフィルム、レコード、磁気テープなどの視聴覚資料も収集対象となる。さらに、古文書、写本、美術品、博物資料、原稿などを収集している図書館もある。このうち「行政資料」というのは、公報、広報誌、行政報告、議事録、議案書、計画書、予算書、監査資料、調査報告などである<sup>(2)</sup>。

図書館法(第三条)により、図書館は地域資料(郷土資料、地方行政資料)の収集に努めるよう明記されている。また、『図書館ハンドブック』(日本図書館協会編, 1985, p.212)で「特定の公共的奉仕圏をもつ図書館は、その地域内に関するあらゆる資料(情報)の収集と利用について、他に転嫁できない最終的な責任をもつ」と説明されるように、文書館や資料館などの類縁機関がない場合は、その地域資料の存在を把握し、収集し、分類し、保存し、継続的な提供を行う役割は、地域の図書館が担うことになる。廣瀬(1990, p.212)は「公共図書館はその所在地域に根ざし、所在地域の特色を活かして運営されなければならない。従って、郷土資料こそ公共図書館における基盤的資料・中核的資料というべきである」と指摘している。

### (2) 参考事例

札幌市立中央図書館を例にすると、同館では「さっぽろ資料室」という独立した区画に地域資料が集められている。蔵書数は約7.7万冊で、そのうち約3万冊が開架されている(2007年4月時点)。ここには札幌および北海道に関する様々な資料があり、例えば、タウン誌、情報誌、同人

誌、札幌や北海道を舞台とする文学やエッセイ、あるいは道内出身の作家の著作、地図、ガイドブック、道内会社史、道内市町村史、道内大学の紀要、道内に関連した写真集、道内産業統計、道内に関する事典や図鑑などの他に、「円山動物園だより」「道立近代美術館紀要」「北海道開拓史記念館だより」などもある。また、アイヌ民族資料、畜産業や獣医学のコーナーが充実していたり、「札幌オリンピック」に関する資料も集められている。視聴覚コーナーには、札幌ゆかりの資料として、伊福部昭のCD、札幌交響楽団のCD、道内の自然などを紹介したDVDやビデオがある。

上記は一例であるが、規模の大小に差があるものの、ほとんどの図書館で地域資料は所蔵されている。地域資料は印刷部数が少なかったり全国的に流通されにくいいため、地域の図書館が収集しないと入手が困難になる場合が多い。

### (3) 分析

「地域資料はその地域の利用者にとって重要かつ有用であるばかりではなく、他の地域、国内ばかりではなく、国外の人々にとっても役立つ情報および情報源となり得る。その意味ではどんなに規模が小さくても世界に向けて発信できる情報なのである」(阪田, 2006, p.151)と指摘されるように、地域資料は地域住民のみならず広く重要なものである。特に、昨今の観光において、様々な意味で「地域」がキーワードになっていることを考えると、地域資料の持つ役割は今後もますます高まるだろう。

地域資料は、観光との融合で考えると、大きく以下2つの点で重要である。

#### ①観光者の情報源として

観光者が、訪問先の歴史や文化、行政、経済、社会など様々な情報を得るのに、図書館の地域資料は極めて重要である。例えば歴史面でいえば、町村合併などによる地名や境界の変遷、あるいは様々な機関や団体の創立・創業、廃止や移転などの情報を探することができる。

文化面でも、同人誌やミニコミ誌などによって地域の文化活動を知ることができる。地域にある神社・仏閣、記念碑、銅像、著名人の生家などの観光資源についてより深く知ろうとする場合にも地域資料が役立つ。他にも行事、郷土芸能、民話・伝承、郷土料理、名物、特産品、気候・風土、植物・動物の生態系、等々に関する情報が得られるなど、図書館の地域資料は郷土資料館に準ずる情報を提供できるといえる。しかも、どういう資料を調べたらよいかわからない場合には、レフ

アレンスサービスを受けることもできる(→A-2-1)。また、地域資料はインターネットで探せないものが多く、こうした資料を実際に見ることが、図書館への訪問動機にもなる。

近年、観光者が能動的、主体的な傾向を持つようになり、学習意欲の高まりをみせていることを考えると、地域理解に役立つ情報が図書館に豊富にあるということが認知されるようになれば、観光者の図書館への訪問も増えると考えられるのである。

## ②地域住民のまちづくりの情報源として

「まちづくりは、まず地元を知ることから始まる」とよく指摘される<sup>(3)</sup>。この点で、図書館の地域資料は、まちづくりのために最も重要な資料のひとつである。なぜなら、まちづくりにあたっては自己検証を繰り返し行うことが不可欠であり、自己検証によってまちの長所や短所を明確にし、長所を伸ばすことにつながるが、そのためには資料の蓄積と参照が不可欠だからである。

また地域資料は、伝統文化の見直しや産業振興の手がかりになるし、地域の隠れたエピソードや忘れられた偉人などを資料の中から再発見することもあるだろう。いわゆる「地域のお宝発見」のヒントが地域資料に潜んでいる可能性は十分にある。

さらに、まちづくりにあたっては地域の歴史に着目することが特に重要である。米良(2008, p.17)は「人気のある観光地に共通する条件の一つは、歴史である」と重要性を指摘しているし、石田(2004)も観光振興における郷土史の重要性を強調している<sup>(4)</sup>。地域資料のなかでも歴史関連資料は基本的なものであるが、こうした観点からも資料の有効活用が図られるべきである。

また、例えば農林試験場や水産試験場の報告書などが図書館に置いてあれば、そこで開発された技術に関する情報を地域住民が共有することができる。このように様々な地域資料を「まちづくりのヒントが含まれていないか」という観点で見直すことも必要である。

地域資料を図書館で保存するのは地域の様々な記録を後世に残すためであるが、この考え方を発展させると、「図書館自身が地域に関する記録を残す」という発想も考えられる。このようなスタンスに立って、積極的に地域文化の保存やまちづくりに貢献するという図書館の役割も考えられるべきである<sup>(5)</sup>。

また、こうした地域資料はたんに保存されるだけではなく、展示会や各種イベント(→A-2-2)で活用したり、「課題解決型サービス」など新たなサービス(→A-2-3)の原資にもなりうる。さらにこれからのインターネット時代においては、地域資料のデジタル化(→C-1)を進めることも重要であるし、自治体や図書館からの情報発信のコンテンツ(→C-2)としても大いに活用すべきだろう。

また、地域資料の収集にあたっては、地域に存在する様々な団体や機関との接触や情報提供

の協力依頼が不可欠となるが、そうした交流のなかで図書館が地域文化の推進役として、あるいは交流の仲介者としてはたす役割も重要であると指摘されている<sup>(6)</sup>。図書館が地域資料の収集に努めることによって、地域内の交流が活性化し、図書館自身の情報拠点としての存在価値のアップあるいはアピールにもつながるのである<sup>(7)</sup>。

#### (4) 備考

このように地域資料は観光やまちづくりに様々な面で有用であるが、大きな課題もある。それは、地域資料が図書館にあるということがあまり知られていない点である。図書館に地域資料があることを観光者が知らないと、図書館で地域に関する情報が得られるとは思いつきにくい。同様に、地域住民も地元に関する様々な資料が図書館にあるということを知らないと、まちの歴史や文化を知ろうとした時に図書館に行くことが思いつきにくい。国立国会図書館(2007, p.1)も地域資料に関する調査結果をふまえて「地域の活性化や市民の課題解決に生かすために積極的に取り組んでいるところは、少なかった」とコメントしており、また大塚(2008, p.228)も、地域資料は図書館がもつ重要な「資源」のひとつだが、従来あまり注目されてこなかったのが残念であると指摘するなど、地域資料が十分には活用されていない状況がうかがわれる。

地域資料がまちづくりにとはたす可能性や、観光者にとっていかに有用な資料であるかを図書館および地域は改めて認識し、その存在をアピールし、より有効に活用されるように努力すべきである。例えば配架や展示の工夫、所蔵目録や内容紹介パンフの作成などによって地域資料の活用を図る必要がある。特に「地域資料が観光者にも有用」という視点はこれまであまり指摘されてこなかったので、観光担当部署や観光案内所との連携も試みられるべきであろう。どのような地域資料があつて、それがどのように役立つかを「観光振興」というテーマから再検討してみると、図書館が収集した地域資料の有効活用につながると思われる。

また、地域資料はデジタル化が遅れがちな点にも留意したい。最近の行政資料などはPDF化されることが多くなってきているし、一般的な文献の電子書籍化が進む兆しもみられるが、地域でしか流通していない文献や資料の掘り起こしとデジタル化は、図書館以外ではなかなか着手しにくい作業である。デジタル・アーカイブズ(→C-1)への取り組みも各館で行われているが、しばらくの間は、インターネットでは地域資料を調査・閲覧しにくい状況が続くと思われる。しかし、そうであればこそ、「現物」としての地域資料の重要性は増すのであり、ここにも観光者を惹きつける要素を見いだすことが可能なのである。

## (A-1-2) 地域テーマに沿った蔵書

### (1) 説明

前項であげた「地域資料(A-1-1)」とは別に、図書館の蔵書が地域文化をわかりやすく反映している事例があるとすれば、それは観光者にとっても有益である。

そこで、地域文化を理解するのに役に立ったり、地域性を感じられるような資料群が図書館にあるかを調べてみると、地域文化に関連する資料を重点的に収集している図書館が多いことがわかった。例えば、府中市立中央図書館では府中市に競馬場があることから「馬」に関する資料、宇治市図書館では宇治茶の産地であることから「茶」に関する資料をそれぞれ収集しているなどである。これを本研究では「地域テーマに沿った蔵書」と名付けておく。これらは「〇〇コーナー」などにより一箇所にまとめられることが多く、図書館の個性を形成するとともに、地域文化を理解するのに重要な資料である。

なお、図書館では地域住民のニーズに配慮して資料を購入しているため、例えば、ガーデニングが市民の間で盛んな地域であれば園芸関連の図書が豊富に揃えられるなどの傾向もみられる。これも広い意味で地域性を感じられる蔵書といえる<sup>(8)</sup>。

### (2) 参考事例

前述した府中市立中央図書館(馬)や宇治市図書館(茶)のように、地域文化に関連する資料を所蔵している事例を付属資料1のリスト(A-1-2)にあげた。リストにあげた以外にも、多くの図書館で地域に関連した様々な資料の収集を行っている。

### (3) 分析

こうした資料群は、一冊一冊で見ればごく普通の一般的な図書であることが多いが、一貫したテーマ(=地域との関連性)に基づいて蔵書が構築されている点がポイントである。コーナーの前に立った時、観光者はまず書架全体を通してその地域のイメージを具体的に体感することができるし、もちろんそれぞれの資料から様々な情報を得ることができる。図書館も、コーナーの演出を工夫したり、資料を紹介するパンフレットを用意するなどして、せっかく集められた資料群を「地域文化のアピール」という観点でも有効活用すべきである。

また、図書館にとって「地域資料」は資料の収集や整理に相当の手間を必要とするが、「地域テーマに沿った蔵書」の場合は、テーマに沿って資料を集め、コーナーを充実させていくことは比

較的容易にできる。その際には、オンライン書店などでたんに書名やキーワードで検索するだけでは捕捉しえない資料を丹念に拾い集めていくことにより、図書館ならではの優位性を示し、あまり知られていない埋もれた資料との出会いを利用者にもたらすことを考慮すべきである。

こうした資料群は、地域住民にとっても、折にふれて地域文化を意識したり学習するための重要な資料となる。例えば、産業遺産が有名な地域であれば、観光者は住民の誰もがその産業に詳しいと思いがちだが、実際にはそうもいかない。そこで図書館が関連図書を揃えたり、わかりやすい資料を紹介したり、勉強会を行うなどによって住民の関心を高め、それにより地域全体のホスピタリティ向上につながることを期待できる。このように地域テーマに沿った蔵書を揃えて活用することにより、地域文化にまつわる住民の教養をアップさせ、観光振興にも役立つ。

また、まちづくりの際に、「わが〇〇市といえば△△」というイメージを設定したり、地域文化のコアとなるテーマを育てていこうとする場合は、図書館と連携して、それに関連する資料の充実が図られるとよい。地域イメージをアピールする方法として、モニュメントを設置したり△△記念館などを設立する方法もあるだろうが、「図書館で関連する資料を集める」という方法も考えられてよいと思われる。

なお、こうした蔵書の中には、一見すると関連性が地域外の者にわかりにくい場合もある。「なぜこれらのテーマに基づく資料群がこの図書館にあるのか」を、適宜パネルなどで解説することも必要である。

前項「地域資料」と本項「地域テーマに沿った蔵書」は、地域の観光資源に関する知識を観光者に与えるのに特に有効であり、観光の様々な場面で有効に活用されることが望ましい。

### **(A-1-3) コレクション・文庫**

#### **(1) 説明**

「地域資料(A-1-1)」や「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」はともに「地域」がキーワードであるが、他に図書館の資料が独自の魅力を持ち、観光と融合する可能性があるかを調べてみると、「コレクション」や「文庫」という有力な要素があることがわかった。

図書館では、通常に購入した資料の他に、なんらかの由来を持つ蔵書群を所蔵している場合がある。一般にこれらは「〇〇コレクション」とか「〇〇文庫」などと呼ばれる。由来は様々であるが、よくみられる例としては、旧家の資料、個人蔵書の寄贈、企業や団体が収集した資料の寄贈などである。(以下、「コレクション」と「文庫」を合わせて「コレクション」とする)

旧家の資料の場合は、地域との間に大いに関わりがあるが、個人や企業に由来するコレクションの場合は、資料自体は必ずしも地域性を持つとは限らない。しかし、その個人や企業が地域となんらかの関連を持つこと(例えば生誕の地であるとか創業の地であるなど)が多く、その意味では、地域とのつながりをそこから感じることができる。

個人コレクションの場合には収集した人の想いや学問的な背景、団体コレクション場合は団体の活動との関連などをうかがい知ることができるため、その個人や団体に関心がある者にとっては非常に魅力を持つものであり、ある意味で記念館に相当する価値を持つともいえる。

## (2) 参考事例

例えば、長岡市立中央図書館では以下などを所蔵している。

- －伊東多三郎文庫(歴史関係資料)
- －笠輪勝太郎文庫(長岡市郷土資料関係資料)
- －川上四郎文庫(絵本・児童画関係資料)
- －斎藤和代文庫(教育関係資料)
- －酒井洋文庫(工学関係資料)
- －反町茂雄文庫(長岡市郷土資料関係資料)
- －星野慎一文庫(ドイツ文学関係資料)
- －堀口大学コレクション(堀口大学関係資料)

全国の図書館には様々なコレクションがあるが、いくつかの事例を付属資料1のリスト(A-1-3)にあげた。

## (3) 分析

コレクションは、由来も含めてその全体で独自の魅力を持っているし、一冊ごとにみても、他では閲覧できない貴重書や絶版などを含んでいる場合が多いので、コレクションの所蔵は図書館のオリジナリティを高める重要な要素である。コレクションを閲覧するために、所蔵している図書館を訪問するという動機は十分に考えられる。そしてたんに図書館でコレクションを見るというだけにとどまらず、そこから地域への関心や親しみへとつながることもありうる。

ここで注意したいのが、「地域資料」や「地域テーマに沿った蔵書」の場合には、図書館の利用に慣れた人であれば、「この図書館に行けばこういう資料があるだろう」という推測がある程度で

きるのに対し、コレクションの場合は、あらかじめ情報を得ておかないと、推測は極めて難しいという点である。コレクションの閲覧が観光動機になりうるということを図書館も自覚して、自館のコレクションをHPなどで情報発信すべきである。また、コレクションに関する解説をパネルにしたり専用のパンフレットを用意したり、地域との関連をわかりやすく示すなどして、地域外からの来館者に対する配慮も工夫したほうがよい。

一方、地域住民も、地域の図書館にどのようなコレクションがあるのかを確認し、それがまちおこしにつながる可能性を検討するとよいだろう。コレクションの由来や寄贈者の略歴を掘りおこしてみたり、関連する場所(例えば生家や碑など)との連携を図るのも一案である。なお、これは「地域テーマに沿った蔵書」が「地域の特色をふまえて蔵書を構成する」という行為であるのとは逆のベクトルで、「蔵書からまちおこし」という発想になる。

またコレクションは記念館や資料館に準ずる情報量を持つことがあるので、すでにその寄贈元の個人や団体の記念館などが存在する場合は、そうした施設との連携を図ることも大切である。

なお、読書家や本のマニアには「他では閲覧できない図書がある」というだけで十分な魅力を持つ。従って、ここであげたような「コレクション」といえるほどまとまったものではなくとも、その図書館にしかない貴重書や特別な来歴をもつ蔵書は、自館のオリジナリティとして大いにアピールすべきである。

#### **(A-1-4) 資料全体との関連**

##### **(1) 説明**

これまで、「地域資料(A-1-1)」、「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」、「コレクション・文庫(A-1-3)」という3つの観点から図書館が観光に寄与しうるものがあるかについて考察を進めてきた。ここで、そうした地域特有の資料や個性的な蔵書にとどまらず、図書館の基本的な機能である「様々な資料を保有・提供する」という点に立ち返り、考察範囲を広げてみる。すなわち、「図書館の資料は全体として観光とどのように融合しうるか」という問題意識に沿って、観光との融合について考察を進めてみよう。

##### **(2) 分析**

まず、図書館の資料が、観光中の様々な疑問を解決したり、関連する情報を得るのに役立つということがあげられる。観光において体験や学習が重視されるようになってきているため、観光者

が観光対象に向ける問題意識も高まり、信頼性のある情報へのニーズも高まる。最近では情報を入手するのにインターネットがよく利用されているが、観光中にインターネットが使える環境にあるとは限らないし、インターネット上での検索が苦手な人もいるだろう。しかもインターネット上の情報は玉石混交で、すべてを信頼するわけにはいかない。図書館に行けば自分で調査できるのはもちろんのこと、レファレンスサービス(→A-2-1)を利用して、安心して情報を入手することができる。

また、地域資料を事典や図鑑類と組み合わせて利用すれば、エコツーリズムや歴史観光などにおいて効果が期待できる。自然観光、産業観光、文化観光というように観光のテーマが多様化すると、観光者が求める情報も多様化するが、様々な資料を保有する図書館であれば、一般的なテーマのみならず、SIT(Special Interest Tour)的なテーマにも蔵書によって対応できる可能性を持っている<sup>(9)</sup>。羽田(2008, p.105)が、観光対象に関する知識が旅行者にあれば、得られる効果はより大きいものになると指摘するように、観光において図書館の資料をいかに活用するかは、これからの大きなポイントである。具体的には、

- －ツアーの開始前や最後に図書館で学習をする<sup>(10)</sup>
- －図書館でガイド養成講座を開催する
- －産業遺産に関する地域資料をまとめたファイルを充実させる

などが考えられる。

あるいは逆に、広島市まんが図書館のように、特定のテーマに蔵書を集中させるという発想も考えられる。

また、最近では滞在型の観光に関心が高まっているが、滞在型の観光においては、滞在中の時間をいかに豊かに過ごせるかがポイントになる。そこで図書館が提供する読書もその選択肢のひとつとして考えられるべきである。実際に「読書コーナー」が充実している施設も登場しており、そこに滞在客への配慮をみてとることができる<sup>(11)</sup>。図書館は本を無料で借りることができるし、立ち読みもできる。自由に好きなだけ本が読める場所があることは、長期滞在者やセカンドハウスを保有している者への娯楽提供という点で重要であり、地域外から滞在者が多く訪れる地域では、図書館を充実させることもおもてなしのひとつになりうる。おもてなしという点でいえば、海外からの観光者に対しても、いわゆる「多文化サービス」の一環として、各国語によるガイドブックや対訳辞典を揃え、さらに地域で作成した各国語に翻訳したガイドマップなども配布することによって、便宜を図ることができる。

また、「地域テーマに沿った蔵書」で述べたことに関連するが、まちづくりの際に図書館の蔵書を効果的に役立てるといふ発想が考えられる。例えば「アートをテーマにまちおこしをする際に、図

書館にも画集を充実させる」というように、まちづくりのテーマに応じて、図書館の蔵書構成を工夫することで、観光者に対して資料館的な役割を提供し、まちの印象をアップさせることができる。これによって観光者のみならず、ふだん図書館を利用している地域住民に対しても、まちづくりのテーマへの関心を高めることにつながる。

さらに、金武(2002, pp.132-133)は「観光は経験的価値を創造する行為である」として、具体的に「娯楽経験」「教育経験」「審美経験」「脱日常経験」の4つの経験価値に注目するよう主張しているが、図書館はこれらに対応しうるものを有していると考えられる。すなわち、①娯楽経験＝娯楽としての読書、②教育経験＝教育(学習)効果をもたらす読書、③審美経験＝画集や写真集、あるいは装丁やデザインの凝った本を読むこと、④脱日常経験＝高額本や貴重本、あるいは他では入手しづらい資料との出会い、と対比できる。このような図書館がもたらす経験と観光がもたらす経験との接点をふまえ、両者の効果的な活用方法を考えることも大切である<sup>(12)</sup>。

## (A-2) サービス

さて、これまで図書館の基本的な三要素(資料、サービス、施設)のうち、「資料」について述べた。

図書館は資料を保管したり、本の貸出を行うことが主な業務であるという印象があるが、それ以外に図書館が提供するどのようなサービスが、観光と融合することがありうるのかについて考察を行う。

### (A-2-1) レファレンスサービス

#### (1) 説明

図書館には多くの資料があるが、「自分が求める情報はどの資料に書かれているか」「この本を探しているが、どこの書架にあるか」など、資料を探すのが困難な場合もしばしば起こる。こうした時には、図書館員にサポートをしてもらうことができる。これを「レファレンスサービス」という<sup>(13)</sup>。

レファレンスサービスはすべての図書館で行われているサービスで、規模の大きい館では専用窓口を設けていることもある。図書館では、レファレンスサービス用の資料を充実させたり、よく質問される事項に関するファイルを用意したり、質問者の意図を正確に把握するためにインタビュー技術を研修したりという努力も行われている。

レファレンスサービスは、窓口で職員に直接問い合わせるだけでなく、電話や手紙などでも

問い合わせが可能である。従って、観光の事前事後に疑問を解決する際にも活用できる。例えば、修学旅行などで訪問を予定している地域の図書館に、事前に適当な文献を紹介してもらうような問い合わせもよくみられる<sup>(14)</sup>。

## (2) 参考事例

国立国会図書館の「レファレンス協同データベース」の中から、地域文化に関連する事例をいくつか紹介する。(レファレンス協同データベース <http://crd.ndl.go.jp/jp/public/> downloaded at 2009.12.15)

- －「越谷市荻島のあたりに昭和20年頃、ロンデン飛行場というのがあったが、これはいつできて、いつなくなったのか」
- －「香川県の三十三観音について調べたい」
- －「昭和30年頃の名古屋市の地図が見たい」
- －「讃岐伝統工芸のかがり手まりの作り方を知りたい」
- －「福井弁で「あばた」「あばたずら」のことを、「めっちゃ」とか「みっちゃ」とかいうらしいと聞いたが、どうなのか」
- －「谷川俊太郎が作詞した合唱曲「きつねのちょうちん」というのがあって、愛媛の民話のもとになっているそうだ。その民話を見たい」
- －「昭和初期に久喜駅で駅弁を販売していた「富壽館」(ふじかん)について記載のある資料を見たい」
- －「富田林市西板持地区に立っている、古い道標(石標)の文字は何と書いてあるのか」
- －「岐阜県の地場産業に関する施策の概要が分かる資料はないか」
- －「イッチョライ節」(福井県)「御前踊り」(福井県大野市)の振り付けが詳しく書かれた資料はないか」

これらはほんの一例であり、多くの図書館で、地域文化に関する質問がレファレンスサービスに寄せられている。そのため地域文化についてよく訊かれる質問をまとめてファイル化している図書館も多い。

## (3) 分析

レファレンスサービスは利用者と図書館の資料を結びつけるためのサービスであるが、これを

観光の場面で考えてみると、観光者に地域の情報を提供する手段として重要な役割を担いうる可能性があることに気づく。昨今はインターネット上の検索エンジンを利用したり、観光協会や自治体、口コミなどで観光情報を入手することが多いが、地域固有のローカルな情報については、キーワードによる検索ではうまくヒットしないことがあるし、そもそもインターネット上にデータがない場合も多い。また文献で調べたいと思っても、どのような資料があるかをインターネットで調べられないことも多い。レファレンスサービスを活用することで、観光者は訪問地に関する的確な情報を得られるし、また実際の資料を閲覧することもできるため、観光体験をより深めることができる。

図書館および地域の側も、レファレンスサービスを「観光者の相談窓口」という視点でとらえ直し、「地域のことでわからないことは、どうぞ図書館でお訊ねください」という案内をしてはどうだろうか<sup>(15)</sup>。こうした対応を行うことにより、地域に関する様々な質問が図書館に集まり、それによって、どのような地域情報が必要とされているかを図書館が把握できる。さらに受けた問い合わせを分析し、行政や観光関連団体などと情報を共有して、パンフレットやガイドマップに掲載する情報を変えてみたり、観光スポットの案内板を工夫したりすることで、観光者に対するいっそうの便宜を図ることが可能になると思われる。

また、レファレンスサービスが、観光者と図書館員との直接コミュニケーションであり、交流につながっている点にも注意したい。観光者は、図書館員の親切な対応や適切な文献を紹介されたことによって感動を覚え、地域に対する好感度がアップすることもあるだろう。

#### (4) 備考

レファレンスサービスは、図書館員の個人的な記憶に頼るのではなく、情報源となる資料を提示することが要求される。従って、レファレンスサービスに必要な資料を図書館が充実させるには費用や手間がかかる。特に地域文化についての詳細な質問に答えるためには、地域資料の目録づくりや整理が欠かせない。また観光に関する情報を提供する場合でも、図書館では宿の手配をしたり交通切符の予約などはできないので、問い合わせ内容に応じて観光案内所などの役割分担を図ったり、図書館で回答が可能な情報とそうでないものの吟味をしなければならない。

また、そもそも図書館がレファレンスサービスを行っているということ自体が広く認知されているとはいえないので、「観光や地域に関する情報を、図書館で問い合わせることができる」という認識も低いと推測される<sup>(16)</sup>。こうした状況を改善するひとつの方法として、図書館がレファレンスサービスを行っているということを、まず地域住民に周知することが必要である。そうすれば地域住

民が観光に行った際にも、「図書館に行って訊いてみよう」と思いつくことが期待できるのである。

## (A-2-2) イベント・行事

### (1) 説明

地域の文化施設のなかでは公民館や市民ホールなどでイベントがしばしば行われているが、図書館でイベントをやっているというイメージはあまり一般的ではない。しかし実際には、図書館でも多彩なイベントや行事や展示会などを開催している(以下、まとめて「イベント」と称する)。イベントの中には、地域文化に関連したものもしばしば行われており、観光者もこれらを見学したり参加することで、地域文化を学んだり体験することができる<sup>(17)</sup>。

『図書館ハンドブック』(日本図書館協会, 2005, p.101)では「地域の専門家や展示に関心のある人たちの協力を得ることで、展示の可能性を広げることができる。思わぬ貴重資料に出会うこともある。展示スペースを一般に開放して町のコレクターを紹介したり、地域の人々による絵画展や写真展を開いたり、生け花や工芸作品展など文化的な行事や研究発表の場に利用することも積極的に行われている」と述べて、図書館で行われるイベントの重要性を指摘している。また塩見(1991, p.76)も、「図書館における企画は、豊富な関連する資料が身近に備わっている場での学習であり、それを契機として、自発的に資料を活用しての学習を継続・発展させることができるというところに大きな特徴がある」と図書館で行うイベント(企画)の特色を説明している。

### (2) 参考事例

地域文化に関するものでは、例えば以下のようなイベントが行われている。

- －所蔵資料展、貴重書の特別公開
- －地元ゆかりの作家による講演会
- －郷土史講座、地域文化の勉強会、祭りや年中行事の文化講座
- －戦争体験を聞く会、地元の歴史を語る会
- －観光ポスターの展示、地域の特産品の展示

文部科学省の調査によれば、2007年度の実績で、読書会や研究会、資料展示会などを実施した館は全国で2403館(全体の約76%)におよび、実施総件数は約8.3万件におよぶ<sup>(18)</sup>。

各地の図書館で行われた地域性のあるイベントのうちいくつかを付属資料1のリスト(A-2-2)にあげた。

### (3) 分析

図書館で行われるイベントは以下の特徴を持っている。

- ①比較的小規模なイベントが多いので、アットホームな雰囲気になり、参加者同士の交流も起りやすい。またイベントの運営や講師などにボランティアが関わっていることが多いので、地域住民の活動ぶりを知ることができるし、地域のキーパーソンとのつながりが生まれる。
- ②図書館の所蔵資料との連携が多角的にできる。例えば、地域に関するものであれば、地域史や統計などを参照することができるし、地元出身作家の講演会などでは実際の作品がすぐ読める。たんにイベントに参加するだけでなく、このように必要に応じて資料にあたることができるので、参加体験をより深めることができる。特に観光者のようにその地域になじみが薄いものにとって、この点は重要である。

図書館も、地域文化に関連したイベントが、地域外へも情報発信の役割を持つことや交流をもたらすという点に着目して、様々なアイデアでイベントを行うとよいだろう。企画内容によっては、他の地域の文化施設などと協同して、広域連携的あるいは地域横断的なイベントを開催するなど面白いと思われる。

### (4) 備考

上記で考察したように、図書館で行われるイベントと観光との融合は様々なものが考えられるが、多数の集客を見込んだ派手なイベントは少ないので、開催予定を知る手段に限られる点に注意が必要である。地元の新聞などで告知されることもあるが、観光者にとって事前に情報を得にくいタイプのイベントである。図書館も、イベントの開催を自館や自治体のHPなどで広く周知するよう努力すべきである。

なお、図書館が行っているイベントや行事は、地域社会との連携からみて重要なものが多くみられるので、それらは「様々な連携(B-2)」や「交流の場としての図書館(B-3)」で扱う。また特に図書館の見学会については、「図書館とツアー(D-2)」で扱う。

## (A-2-3) 様々なサービスとの関連

### (1) 説明

これまで「レファレンスサービス(A-2-1)」と「イベント・行事(A-2-2)」について考察してきたが、図書館ではそれ以外にも様々なサービスを行っている。特に最近では、図書館が新たなサービスを展

開しつつあり、それらとの関連について考察してみよう。

図書館が行っている新たなサービスのなかで、なんらかの課題を解決するためのサービスには特に関心が集まっており、それらは「課題解決型サービス」と総称されている。例えば、『地域の情報ハブとしての図書館』（図書館をハブとしたネットワークのあり方に関する研究会，2005）では、「地域課題の解決支援」として「ビジネス支援」や「行政情報提供」を、「個人の自立化支援」として「医療関連情報提供」や「法務関連情報提供」を、「地域の教育力向上支援」として「学校教育支援」や「地域情報提供・地域文化発信」をあげ、さらにそれぞれを詳細に分析している。

根本(2004, p.93)は、こうした新たなサービスが注目を集めるようになった背景を、「recreationからcreationへのパラダイム転換がはかられようとしている」と分析し、一般市民への教養・娯楽施設としての位置づけだけではなく、仕事や経済面にも図書館のサービスが焦点をあてるようになったことにあるとしている。また渡部(2006, p.12)は、「現在の図書館に求められるものは、地域の実情にあった図書館サービスである。何故ならば公共図書館としての公共性を追求すると、“まちづくり”を視野に入れた図書館サービスの視点が重要だからである」として、新たなサービスを、地域の実情をふまえたまちづくりの一環としてとらえられるべきだと述べている。

もとより図書館は、所蔵資料などを通して利用者の疑問や問題の解決に寄与してきたが、「課題解決」を明示的に意識するようになったのは最近のことであり、その意味では「課題解決型サービス」は新たなサービスといえる。従って、こうしたサービスの必要性については議論もあり、そのあり方や実施にあたっての問題点などについても検討が進められている。観光と図書館の融合を考察するうえで、こうした図書館の新たなサービスに着目することは大切であるが、同時に、未知数の部分が多いという点にも留意が必要である。

## (2) 参考事例

『これからの図書館像』（これからの図書館の在り方検討協力者会議，2006）では、「課題解決を支援する図書館サービス」の事例として北広島市図書館、静岡市立御幸町図書館、鳥取県立図書館が紹介されており、「多様なニーズへのサービス」の事例として倉吉市立図書館が紹介されている。また大串(2008)では、鳥取県立図書館(ビジネス支援事業)、上田情報ライブラリー(青年・女性のキャリアアップと就労支援)、福岡県立図書館(仕事と暮らしに役立つ図書館)、福井県立図書館(食育支援)、横浜市立図書館(行政支援サービス)などの事例が紹介されている。

なお、「ビジネス支援図書館推進協議会」(<http://www.business-library.jp/index.html> downlo

aded at 2009.12.15)という非営利組織もある。

### (3) 分析

このような新たなサービスは、本来は地域住民のために行われるものであるが、地域外の人々にとっても大いに刺激となる。まず、こうした事例がメディアなどで紹介されると関心を集め、「どのようなサービスなのだろう」→「なぜあそこの図書館では、そのようなサービスを行っているのだろう」→「地域の実情とどう結びついているのだろう」→「実際に地域で歓迎されているのだろうか」という具合に、地域への関心につながる可能性がある。このようにして、地域の課題解決に取り組む図書館の姿勢が、ある種の情報発信効果を持つことがありうる。

また、自分にとって有用だと思われるサービスの場合は、地域外であってもその図書館を訪問して体験してみたり、視察をしたり、図書館員にサービスの内容を質問するということが起こるだろう。このような訪問動機をもたらしたり、そこから交流が生まれることも十分考えられるのである。従って、新たなサービスを行う場合には、地域外にもインパクトを与えることを考慮して、地域内のみならず地域外へも周知をすべきである。

さらに、広い意味で「地域支援」という発想をとらえると、その対象は必ずしも地域住民とは限らない。例えば、ビジネス支援であれば、地域外に向けてアピールすることによって企業や人材の誘致につながる可能性がある。健康情報サービスに力を入れることで「あそこのまちは健康意識が高く、健やかに暮らせる地域だ」という印象を地域外にも与えることもあるだろう。それをふまえてヘルスツーリズムと連携するなどの展開が考えられるのである。このように、図書館における新たなサービスが地域外にも及ぼす効果を考慮してみると、まちづくりや観光振興につながる可能性を持っていることがわかる。

また、今後の新たなサービスの方向性として、「観光支援」や「交流支援」という発想に基づいて、地域内と地域外の双方を意識したサービスがあってもいいと思われる。

### (4) 備考

なお、前述したような「新たなサービス」のみならず、従来から行われてきたサービスについても、観光との融合という観点から見直しが可能であることを指摘したい。例えば以下などが考えられる。

①図書館が地域の団体などに資料をまとめて貸し出すサービスがあり、これを「団体貸出」とい

う。このサービスを応用して、例えば学会やコンベンションなどが開催される際に、関連図書を会場で展示したりすることが考えられる。あるいは地域で行われる様々なツアーと連携して、必要な図書を一時的に貸与するなども考えられる。

②図書館への来館が困難な人々に配慮するサービスを「アウトリーチサービス」という。このサービスを応用して、例えば湯治客、病気による保養者、障害者グループの旅行団体などへ便宜を図ることが考えられる。また「アウトリーチサービス」ではないが、ユニバーサルデザイン的な観点でいえば、点字図書は目の不自由な観光者に、大活字本は高齢の観光者に便宜をもたらすだろう。

③図書をバスや船に積んで地域を巡回するサービスを「移動図書館」という。このサービスを応用して、交通が不便な山間部や離島などにある観光地へも、巡回サービスを行うことが考えられる<sup>(19)</sup>。

④宿泊施設や観光施設などの「図書コーナー」の開設にあたって、図書館が選書や配架などをサポートすることが考えられる。

上記であげたようなサービスの実施にあたっては検討すべき点も多いと思われるが、既存のサービスを観光と融合させるアイデアについて、地域と図書館が知恵を出し合っていくことが必要である。図書館の可能性は「新たなサービス」だけにあるのではなく、既存のサービスを応用することにもあると思われる。

### **(A-3) 施設**

ここまで「資料(A-1)」、「サービス(A-2)」について考察してきたが、次に、図書館の(物理的な建物としての)「施設」が観光とどのように融合する可能性を持つかについて考察する。

#### **(A-3-1) 設計やデザインの効果**

##### **(1) 説明**

図書館の建物はどちらかというと外見は無愛想で、内装的にも「本がただ並べられているだけ」というイメージがあるが、調査をしてみると、個性的なものや、様々な意味で楽しそうな図書館も全国あちこちでみられた。デザイン面でも、スペースの取り方や書架の配置、色遣いや家具などに至るまで細かい部分について工夫された図書館も増えている。特に「滞在型」を意識した図書館では、「図書館に来てもらおう」、「図書館でくつろいでもらおう」という配慮が感じられる。

なお、最近の図書館建築については、「人と資料群が出会い対峙する伝統的な場から、新たな要素－資料が媒介する個とコミュニティとをつなぐ空間デザイナーへ志向する図書館の変貌が垣間見られる」<sup>(20)</sup>という指摘がある。図書館がコミュニティスペースとしてとらえられ、それを意識した設計がなされるようになってきていることは、交流を重視するようになってきている観光にとっても重要な意味を持つといえる。

## (2) 参考事例

設計やデザインに特徴がある図書館の事例を付属資料1のリスト(A-3-1)にあげた。

また現代的なデザインではなく、例えば大阪府立中之島図書館のように重厚長大風な建物が歴史を感じさせることもある。あるいは森鷗外の自宅であった文京区立本郷図書館鷗外記念室のように、建物の由来や設立の経緯などに歴史性を感じられるケースもある。

なお、設計が優れたものは表彰を受けることがあり、それにより見学者が訪問するきっかけになる。(→D-1)

## (3) 分析

図書館の設計やデザインは、地域住民に親しみを持ってもらったり、アメニティ向上のためにあるので、観光者への集客効果を狙ったものではないが、特徴のある図書館であれば、見学のために訪問してみたいという気になり、観光者を呼ぶ効果も起こる。また、「行ってみたいくなる図書館」や「使い勝手のよい図書館」という狙いが効果をあげている場合は、地域住民がよく利用し、愛着を持たれる図書館になっている可能性も高く、そこに観光者と地域住民の出会いのきっかけがもたらされる。

また、「ユニークな図書館(建物)を訪問したい」という動機は、図書館のファンや建築に興味がある人には特におこりやすいと考えられるし、インターネットでもユニークな図書館が話題として取り上げられることがある。(→C-3)

なお、設計やデザインの効果によって図書館の施設が観光対象になった場合でも、せっかく訪問して来た観光者に対し、建物の見物だけに終わることがないよう、地域資料の紹介などをうまく工夫して、地域理解への誘導を行うことが望ましい。

## (A-3-2) 複合施設の効果

### (1) 説明

前項「設計やデザインの効果(A-3-1)」でとりあげたような特徴がない場合であっても、施設が持つ特徴が観光と融合する可能性について考察してみると、注目すべきケースが2点ほどあるように思われる。

ひとつめは、博物館や郷土資料館などの文化施設と併設(あるいは隣接)した「総合文化センター」のようなケースである。最近では複合施設の一部として図書館が建設されるケースもみられる。

もうひとつは、鉄道駅や道の駅など交通関連施設に併設(あるいは隣接)した図書館の事例である。これも全国に多く存在する。菓袋(2008)は、「最近では駅前に図書館をつくる自治体が増えていて、にぎわい創出や中心市街地活性化などが期待されています」と述べてまちづくりとの関連を指摘する<sup>(21)</sup>。また桂(2001, p.154)も、「駅前再開発などで、地域開発の中心的な施設として図書館が位置づけられることが多くなっているのです。図書館には集客力があるからです。多くのユーザーが利用するため、新しい市街地を計画する際に、その地域の商店街などが活性化するという見込みによるものです」と、図書館の立地条件が重要であることを指摘している。

### (2) 参考事例

例えば駅舎に併設して効果をあげている事例として、舟橋村立図書館がよく知られている。こうした複合的な施設に関連した図書館の事例を付属資料1のリスト(A-3-2)にあげた。

また、「複合施設」をより広くとらえると、カフェや物販コーナーなどを併設する図書館も増えてきており、これによって利用者にリラックス効果や交流をもたらしている。

### (3) 分析

他の施設と併設あるいは隣接されている場合は、観光者にとって移動の負担が少ないし、図書館の存在にも気づいてもらえるので、相乗効果による利用が期待できる。しかし図書館が様々な点で観光や地域文化の理解に役立つということが、まだあまり知られていないので、観光中に図書館を利用しようという考えがおこらず、博物館や郷土資料館などと隣接されていても、図書館だけ素通りされてしまうこともあるだろう。複合施設全体でお互いをうまくアピールし、例えば「お帰りには、図書館もご利用ください」と誘導をしたり、郷土資料館で質問を受けた係員が「図書館に行くと、関連する資料がありますよ」と案内するなどの連携が必要である。また、博物館や郷土資料

館、美術館などはしばしば団体見学も行われるので、見学後のルートとして図書館を組み込んでおき、見学内容を図書館の資料でさらに深く掘り下げるといった連携も考えられる<sup>(22)</sup>。

駅舎や駅ビルと一体化していたり駅の近くに図書館がある場合は、観光者が列車の発車待ちや乗り換えのため時間つぶしに図書館を訪問するという動機がありうる。道の駅の場合では休憩やトイレの利用などに併せてぶらりと訪問するということが考えられる。このように特に目的意識がなく訪問した観光者に対しても、ディスプレイや案内などを工夫すれば、観光情報や地域の魅力をうまく発信することができる。それをきっかけにして、観光者が予定外の観光を追加することもあるだろう。また「駅」という施設自体が、観光において独自の役割を持っているといえるので、ターミナル性を持った施設に隣接した図書館では、「情報センター」的な役割を持たせることも考えられる<sup>(23)</sup>。

さらに、カフェや物販コーナーなどのスペースをうまく利用して、交流イベントや地域の物産展示などを行うことも考えられる。

#### **(4) 備考**

ここで、観光者に対する図書館の利便性についても考察をしておこう。

最近の図書館は、開館時間が夜間まで延長されたり、祝日や休日にも開館するなどの傾向がみられる<sup>(24)</sup>。こうした傾向は観光中に図書館を訪問するのに都合がよい。また、地域住民以外への貸出を認めている図書館も多いし、返却用に市内各所に返却ポストを設置しているところもある。こうした配慮により、観光者が現地に滞在中に本を借りたり返却することが容易になる。

#### **(B) 地域社会との関連**

これまで、図書館の基本的な要素（「資料」「サービス」「施設」＝分類A）における観光との融合の可能性について考察を行ってきた。しかし、図書館は地域とかけ離れて独立した存在ではなく、地域と密接に関わる施設である。従って、図書館の基本的な要素についての考察のみでは不十分であり、「図書館と地域社会の関連が、どのように観光と結びつくか」という問題意識による考察が不可欠である。

そこで考察の範囲を広げて、図書館と地域社会との関連から、観光との融合の可能性を考察してみる。

## **(B-1) まちづくりとの連携**

### **(1) 説明**

図書館が本を貸したり読書の場を提供するだけの施設でないことは、これまでも述べてきたが、「図書館がまちづくりに関わっている」というイメージは、一般的にはなじみが薄いと思われる。しかし、塩見(2008, p.110)は「一つのまちに図書館をつくることは、それ自体がまちづくり構想ののった計画の一環」だと述べて、図書館の設立自体がすでにまちづくりに関わりがあると指摘している。

また、吉田(2008, p.135)は、「ニューパブリックマネジメントの導入を背景に、図書館から利用者への一方向型のサービスモデルにかわる住民参加型の図書館運営が求められるようになった」として、「従来、図書館サービスの対象者としてのみ認識されていた利用者は、図書館運営に主体的に参加する存在として再規定される必要が出てきている」と現状を分析する。地域分権の動向などに伴い、図書館とまちづくりや住民活動が相互に連携しあうことがいつそう求められてきているといえる。

そうしたなかで、特に顕著な活動を行っている図書館が文献で紹介されたり、住民らによる図書館づくりの過程が実践記録として出版されたりしており、これらは図書館とまちづくりの関わりを知るうえで貴重な手がかりとなる。

### **(2) 参考事例**

まちづくりとの連携というテーマでよく知られている事例としては、浦安市立図書館、置戸町立図書館、斐川町立図書館、静岡市立御幸町図書館などがある。

また、『週刊ダイヤモンド』(2007年6月2日号、ダイヤモンド社)では、「知恵と熱意で地方が取り組む図書館を核にしたまちづくり」という特別レポートで、矢祭もったいない図書館、舟橋村立図書館、斐川町立図書館、東近江市立図書館がとりあげられている。また、『これからの図書館像』では、図書館とまちづくりに関する事例として、愛知川町立図書館の事例を紹介している。『開発こうほう』(2008年3月号、北海道開発協会)では、鳥取県立図書館、北広島市図書館、置戸町立図書館の事例が紹介されている。

上記以外にも様々な事例があるが、主な参考文献を付属資料1のリスト(B-1)にあげた。

### (3) 分析

前述したような図書館がまちづくりに関わっている事例は、観光と直接結びつくわけではないが、「観光まちづくり」を考える際には大いに参考になる。また、こうした事例が文献などで紹介されることによって、「図書館の活動が活発なまち」、「地域住民が図書館づくりに積極的に参加しているまち」といった印象を与え、地域の好感度アップにつながるという側面もある。地域と一体になった図書館の活動は、地域への寄与のみならず、地域外住民にとってもアピール効果を持つと考えられる。

『地域の情報ハブとしての図書館』（図書館をハブとしたネットワークのあり方に関する研究会，2005，p.50）では、「公共図書館が地域情報・地域文化情報を集約し、地域内外に向けた拠点となることは、地域住民にとっても、自らの地域文化を認識することに繋がるとともに、地域への愛着を高め、結果として地域コミュニティ全体の安定と発展に貢献するものであると言える」と指摘したうえで、「地域住民の地域文化に対する深い理解に基づき、地域の魅力を発信・アピールしていくことは、観光・訪問・移住という形で地域に還元されていくと言える」と述べ、図書館の活動が観光にも結びつくことが明確に示されている。

第1章2節「(2)地域貢献のあり方」でも述べたが、図書館が「まちづくり」との連携を改めて重要視するようになり、一方、観光も「まちづくり」から始めることが必要な時代になってきている。すなわち図書館と観光は「まちづくり」をキーワードとして共通の意識（あえていえば危機意識）を持っているのである。

## (B-2) 様々な連携

### (1) 説明

前項では特に「まちづくりとの連携」に注目したが、より広い観点で「連携」をとらえて調べてみると、図書館が行政当局や様々な機関・団体などと連携して活動を行っていることがわかった。そうした参考事例のなかには観光に関連するものがみられるので、観光と図書館の融合を考えるにあたってヒントになると思われる。

### (2) 参考事例

図書館が行政や市民らと連携して活動している事例として以下などがある。

－東京都立図書館が五輪誘致に合わせて、「オリンピックを楽しむ」という展示会を行った。(20

08年8月8日～9月3日)

－横浜市立図書館は、市内の全18館で横浜開港150周年に合わせた記念イベント「港の150年、この地の150年」を開催した。(2009年4月1日～6月30日)

－山口県立図書館は、山口市と共催で「山口市中心市街地まちと文化推進事業」として「山口県立図書館 まちなかライブラリー in 商店街」を実施した。このイベントでは商店街の空き店舗を利用して、県立図書館が展示をしたり本の貸出をした。(2008年10月11～13日)

－葛飾区立図書館とNPO法人ユニコムかつしかは、葛飾に関する様々な情報を収集・公開するサイト「区民がつくる葛飾百科」の企画・作成を協働事業として行っている。

－逗子市ではフィルムコミッションに力を入れているが、図書館でも無料上映会を行うなどにより連携した活動を行っている。

他にも「出前講座」として図書館員が各所で講座を行ったり、「ブックスタート」として乳児のいる家庭へ絵本を配本したり、総合学習の受け入れによって学校と連携するなど、様々な活動を図書館は行っている。参考事例を付属資料1のリスト(B-2)にいくつかあげた。

### (3) 分析

図書館が様々な意味で「連携」をしながら活動していることは、観光と図書館の融合を考える際にも重要である。なぜなら、図書館という存在をそのみでとらえることから一歩進めて、その先にある「連携」を含めた展開の可能性を見いだすことができると考えられるからである。そして「連携」はさらに「交流」にもつながる要素であり、そうした観点からも重要性を指摘することができる。

しかし、一口に「連携」といっても様々であるので、ここでは「連携」を、「地域内連携」と「地域外連携」に分けて考察を行う。

#### ①地域内の連携

観光振興にあたって、図書館のもつ様々な資料は重要な情報源であるから、観光に関わる行政部署や商工会、NPO、観光業者などは、どのような資料が図書館にあるかを確認し、資料の有効的な活用を常に心掛けるべきである。さらに資料の活用のみならず、図書館の持つノウハウや場所の利用なども含めて、図書館とどのような連携ができるかを図書館と共に検討していくことが望ましい。

また、図書館が地域資料を収集する際に、行政情報センターや文書館、博物館などとの連携

が重要であることが国立国会図書館(2007)などでも指摘されているが、こうした連携を密にすることで地域資料の把握が容易になり、まちづくりなどで資料が有効に活用されることが期待できる。すでに図書館が様々な記録の集約拠点・保存機関として十分に活動している場合は、そうした図書館の役割が、地域において明確に意識されることも大切である。

また、「レファレンスサービス」の項でも述べたが、観光者へ地域情報の提供を行う場合には、図書館や観光案内所などでそれぞれ得意とする分野が異なるので、役割分担を確認したり相互に情報を提供しあうなどによって連携を図るとよいだろう。仮にそのような連携がなかなか実現できないとしても、せめて観光ガイドマップに図書館を掲載するという配慮は最低限行うべきである。これによって観光者が図書館の存在を意識し、「図書館にも行ってみよう」と思ってもらえることができる<sup>(25)</sup>。

こうした主に資料面・情報面での地域内連携を図書館が軸となって進めることによって、地域内のどの機関がどういう資料を保有し、あるいは今後どのように保存していくかという点について地域としての共通認識が生まれ、地域文化の保存と活用が期待できる。それにより、地域振興や観光振興のためのいわば「基礎体力」が養成されるのである。しかも、そうした連携の中で、地域内の交流や連帯感が促進されることも期待される。

なお、もうひとつ重要なポイントとして、地域によっては図書館が本館と分館を持つ場合があるが、これを「図書館のネットワーク」としてのみとらえるのではなく、「地域の情報網」という視点でとらえると、ここから様々な連携の可能性が考えられる点もあげておきたい。

## ②地域外との連携

図書館は、資料の相互貸借などで協力した活動を行うために「図書館協力」というネットワークを有し、日本中の図書館と様々な連携を行っている<sup>(26)</sup>。こうした図書館同士のネットワークを、お互いの地域文化の情報交換や交流のための仕組みとして有効に活用することによって、まちづくりや観光振興に役立てることも考えられてはどうか<sup>(27)</sup>。また地域が設定している「姉妹都市」や「友好都市」との連携を図書館も意識し、相互展示や相手都市の紹介イベントを行うなどによって、観光のための周知・交流活動を行うことも試みられるべきである。

## (4) 備考

なお、最近では大学図書館も、公共図書館と相互提携を結んだり、地域住民に開放するなど

のオープン化の傾向がみられる。大学図書館にもコレクション(→A-1-3)が保有されていることがあるので、一般に開放されればこれも観光資源になりうる。

### **(B-3) 交流の場としての図書館**

#### **(1) 説明**

地域の施設でいうと、地域住民が交流する場としては公民館や文化センターがまずイメージに浮かび、図書館は利用者が個別に黙々と読書をしているかのようなイメージがある。図書館が地域住民の交流に寄与することがあるかについて、検討を行ってみよう。

『図書館情報学事典』(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編, 2007, p.174)では、「(図書館は)共時的には、社会における知識や情報の伝播を円滑にするコミュニケーションの媒介機関としての役割を果たす」として、図書館にコミュニケーションの媒介機能があることを明確に定義している。この定義ではわかりにくいので、図書館が交流にはたす役割をより具体的に、①図書館運営への参加、②図書館を舞台とした交流、の2つに分けて考え、以下それぞれについて概説する。

#### **① 図書館運営への参加**

図書館の運営に対して住民の参加の仕方は主に三とおりある。まず、a)ボランティアとしての参加、そして、b)図書館友の会などへの参加、最後に、c)図書館協議会の委員としての参加である<sup>(28)</sup>。このなかでボランティアに注目してみると、全国の図書館の約68%にボランティアの登録制度があり、約3.2万人が活動している<sup>(29)</sup>。活動内容は様々で、書架の整理、受付、読み聞かせ、各種行事のサポートなどである。ボランティアなどによって図書館の運営に地域住民が参加することで、図書館は地域社会との連携を深めて多様な意見を反映することにつながり、地域住民は活動意識が高まり、住民間の交流をもたらすきっかけとなる。

このような図書館ボランティアが、他の人々の学習を支援すると同時に、自らの学習意欲を維持・昂進させることにつながるため、生涯学習社会を推進させる重要な担い手であることを指摘する意見もある<sup>(30)</sup>。

#### **② 図書館を舞台とする様々な交流**

図書館が資料を購入する際は、地域住民のリクエストに応えたり、地域のニーズを考慮している

が、その際にカウンターでの住民とのやりとりなども参考になる場合があるという<sup>(31)</sup>。そのような職員と利用者との交流以外にも、利用者同士の交流も様々な場面で起こる。例えば、図書館で行われるイベントや行事(→A-2-2)を通してであったり、あるいは読書会、郷土文化研究会などが図書館で会合を開いたり、さらには利用者同士の情報交換などにより、図書館が地域住民の交流の場としても機能していることは、多くの図書館員が認めるところである。

菅原(1999, p.54)は「地域に住む人々の心を一つに結び、地域のありようを支えるものが求心力である。その求心力はどこにあるか。いうまでもなく、図書館である。(中略) 図書館はいま、図書館にとどまっていない。本を読まない人も気軽に出かけ、思い思いに時間を過ごすことができる。(中略) 図書館は本に出会い、人に出会うところだ。人と人との出会い、求心力はそこから生まれる」と述べ、地域社会の空洞化や崩壊を防ぐためにも図書館が大きな役割を果たすことを期待している。長年、図書館界で活動をしてきた著者の思いも込められた文章ではあるが、交流の場として図書館が持つ重要性が、ここに端的に示されているといえるだろう。

## (2) 参考事例

『これからの図書館像』(これからの図書館のあり方検討協力者会議, 2006)では、「市民参加での図書館づくり」として伊万里市民図書館の事例が紹介されている。また、前述した「図書館友の会」は、最近では「サポーターズクラブ」などの名称で設置され、会員同士の交流活動が盛なものもみられる。

地域の交流に図書館が関連している事例を付属資料1のリスト(B-3)にあげた。

## (3) 分析

以上にみたように、図書館は「交流の場を提供している」ととらえることができる。この機能は、これまで一般的にはあまり意識されておらず、今後の新たな図書館のあり方を探るうえでひとつのポイントになるが、こんにちの観光が「交流」を意識するようになってきた事実を照らして考えると、さらに重要な意味を持つといえる。

地域住民によく利用され、交流が活発な図書館であれば、観光者にとっても「地域住民との交流が期待できる場所」という新たな魅力を持つだろう。図書館を「本を借りたり貸したりする場所」としてのみとらえるのではなく、交流をもたらす場所としてとらえたとき、それは「交流としての観光」という発想と結びつき、図書館の可能性が広がるのである。

ただし、これまで図書館は地域住民のための施設としてとらえられていたため、地域と観光者との交流に対して図書館がどのような機能をもつかについての分析は、今後の研究課題として残されている。これについて、本論の第4章において、「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」というかたちで試案を提示している。

一方、観光振興においても、堀川(2007, p.172)は「観光振興のためのさまざまな活動をほんとうに息長く実のあるものにするためには、学生や市民を中心としたNPOの、“底辺”での地域に密着した活動こそが、直接の観光事業者を中心にして発展させる同心円の拡大に大きな役割を果たせるものとして期待されている」と述べて、ボランティアの重要性を指摘している。

また、まちづくりとの関連でいえば、地名の保存運動や戦争体験を伝える活動、後継者が不足している伝統芸能の保存活動などが図書館と連携していくことも考えられる。中谷(2005, p.27)は「地域文化は決して排他的なものではなく、地域以外の人々をも巻き込んで展開する可能性を秘めているのである」と述べて、地域文化の担い手が地域外にもありうることを示し、人の交流のなかでこそ文化創造が可能であると指摘しているが、こうした観点からも図書館がもたらす「交流」の意義がとらえられるべきである。

#### (4) 備考

図書館が「交流をもたらす場」であるという点についてももう少し考察してみよう。インターネットの発達に伴い、資料やデータを得るだけなら図書館に行かなくて済む場合もあるし、今後もますます資料などのデジタル化は進むだろう。しかし一方で、インターネットが普及して仮想空間で情報が容易に入手できるような時代であるからこそ、改めて「場所としての図書館が必要である」という指摘があることにも留意しなければならない<sup>(32)</sup>。こうした指摘をふまえると、図書館という実空間(場所)が存在し、そこで人と資料、あるいは人と人の出会いが身体性を伴って行われることが重要なのだと考えられる。観光者が訪問先の図書館で、見知らぬ資料や地域性を持った書架に出会うことで生まれる体験や感動、あるいはそこで地域の人々との交流が生まれること、このような「図書館を実際に訪問することによって得られる体験」の意義が改めて認識されるべきである。

古池(2007, p.182)は、「文化が、人と人、あるいは人と場の相互作用のなかで生まれるものだとすれば、こうした相互関係を実践する場に社会関係資本が蓄積していくことは容易に想像できるだろう。そのため、文化を支える基盤としての劇場や美術館、博物館、競技場などは欠かせない」と指摘する。この文章に「図書館」は登場していないが、当然含まれるものとして考えてよい。

インターネット時代であるからこそ、身体性を伴った交流や体験を観光や図書館がもたらしうることに注目する必要がある。

### **(C) インターネットの発達との関連**

ここまで、まず、「図書館の基本的な要素(分類A)」について述べ、次に「地域社会との関連(分類B)」において、図書館と地域社会との関係における直接的あるいは間接的な観光との融合の可能性について考察した。

しかし、周知のように現代社会はインターネットの普及が急速に進み、これによって観光も図書館も大きな影響を受けている。例えば、観光でいえば、訪問先情報の入手方法、交通機関や宿泊施設の予約方法が大きく変化しているし、図書館でいえば、インターネット上での蔵書検索やインターネット経由での貸し出し予約などが進んでいる。従って、観光と図書館の融合を考察するにあたって、「基本的な要素(A)」や「地域社会(B)」といういわばアナログ的身体的な項目だけではなく、デジタル的仮想的な面についての考察も不可欠である。

従って分類項目をここに設け、「インターネットの発達との関連」という観点から、図書館と観光との融合について考察を行う。

#### **(C-1) デジタル・アーカイブズによる情報提供**

##### **(1) 説明**

図書館が所蔵している資料をスキャナーなどを使ってデジタル画像化し、それをインターネットで公開することが増えている。その際に、図書館が保存している貴重資料や地域資料などがデジタル化の対象になることが多い。これらは「デジタル・アーカイブズ」と呼ばれるが、「アーカイブズ」とは「書庫」という意味である。図書館のHP上に、デジタルデータによるいわば仮想の書庫を用意し、自館の持つ資料を広く公開することによる情報提供である。

地域資料は、すでに述べたように地域のことを知るのに重要であるが、内容がデジタル化されるか、あるいはせめて資料のタイトルや概要がインターネットに公開されるなどしない限り、検索してもヒットしないしリンクも張られないので、インターネット上では存在しないに等しいことになってしまう。なんでも検索エンジンで済ませてしまう傾向が強い現代において、「インターネット上で存在しない」は「実際に存在しない」と同義に受け止められかねない<sup>(33)</sup>。

従って、デジタル・アーカイブズ化の推進は、図書館にとっては手間暇がかかる作業であるが、

こんにちのインターネットの普及を考慮すると、社会的な意義は大きい。

## (2) 参考事例

2点ほど参考事例をあげる<sup>(34)</sup>。

### ① デジタル岡山大百科(岡山県立図書館)

岡山について百科事典的に調べられることを目指して構築された県民参加型の電子図書館システム。岡山県庁の行政情報(観光映像を含む)、岡山県古代吉備文化財センターの文化財情報、岡山大学の学術成果情報などを網羅している。特筆すべきは、県民から提供された4千件以上の情報を収録するなど、県民の参加を積極的に呼びかけている点で、これまでに「デジタル絵本」づくり、ボランティアとのネットワーク構築、映像コンテスト「デジタル岡山グランプリ」の実施などが県民との連携によって実施された。(http://www.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/ downloaded at 2009.12.15)

### ② デジタル資料館(函館市中央図書館)

「函館史市デジタル版」「はこだて人物誌」「ポスターコレクション」などをはじめ、古地図、古写真、絵はがきなどのデジタル化を進めている。また、公立はこだて未来大学の作成した古文書撮影システムを導入したり、ボランティアの協力を得るなど、デジタル化作業において様々な連携が行われている。(http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html downloaded at 2009.12.15)

上記以外の参考事例を付属資料1のリスト(C-1)にあげたが、これらはほんの一部であり、全国各地の図書館で、資料のデジタル化が進められている。

## (3) 分析

デジタル・アーカイブズと観光との融合についてはいくつかの可能性が考えられる。

まず、図書館が保有する貴重な資料の存在が広く認知され、さらに実際の資料の画像を簡単にインターネットで閲覧することができるようになることは重要である。なぜなら、観光と深い関連のある資料(例えば古地図や絵はがきなど)のデジタル化は、それをインターネット上で観た人が、その地域に関心を持ち、観光を促進するきっかけとなりうるからである。また「デジタル画像ではなく、実際の資料を見てみたい」と考え、所蔵している図書館への訪問が増える可能性もある。

次に、観光スポットなどで「そこが以前はどのような姿をしていたか」、「昔のメディアではどのよう

に紹介されていたか」などを簡単に紹介できる可能性を持っていることにも注意したい。例えば観光スポットに端末を置いて、図書館のアーカイブズを表示すれば、こうした演出が可能になる(この場合、インターネット経由でなくともコンテンツをDVD化してもよい)。また、地元メディアのアーカイブズとリンクさせたり、「より詳しい情報はこの本にあります」と関連資料を紹介するといった、多角的な情報提供への発展も考えられる。

本来、図書館は観光のためにデジタル化を行っているわけではないが、もし観光への効果をあえて意識するならば、昨今のレトロブームを利用して、戦前戦後あたりのレトロな雰囲気を持った資料(例えば、当時の観光ポスターや地方紙の記事など)を優先的にデジタル化することも考えられる。

またデジタル化は図書館が所有する資料に限定するのではなく、地域住民に資料の提供を呼びかけるなどして、地域全体の様々な資料のアーカイブズ化を進めることも考えられる。それにより地域内で情報を共有化し、地域住民の持っている貴重な資料を地域外へ情報発信することができる。

図書館が所蔵するデータのデジタル化はまだ始まったばかりであるため、前述したような「図書館によるデジタルデータの公開が、観光の呼び水となる」という効果がどの程度期待できるかは、今後の検証を必要とする。とはいえ、インターネットがこんにち主要な情報入手の手段となっていることをふまえると、様々な地域情報をデジタル化してインターネット上にアップロードすることに、マイナス面があるとは考えにくい。例えば、ある地域に関するキーワード検索などにおいて、(信頼性ある)図書館によるデータがヒットすれば喜ばれるし、その地域への関心が高まると考えてもよいだろう。従って図書館の側も、「どのようなキーワードで検索されているか」、「どのリンクをたどってサイトを訪問したか」などをきめ細かく分析し、地域に対する関心のあり様を敏感にキャッチして、観光関連部署と連携して対応策を講じる必要がある。

## **(C-2) 情報発信の多様化**

### **(1) 説明**

これまで図書館による情報発信は、「図書館報」や「図書館だより」などの紙媒体が主であったが、インターネットが普及するにつれて、図書館も自館のHPを持ち、情報発信をするようになってきた<sup>(35)</sup>。しかし、内容やデザインなどで相当のバラつきがみられ、どのような情報発信を行えばいいかなどについて模索中の図書館も多い。

そうした状況にあつて、先進的な試みとして、ブログやメールマガジンを利用した情報発信などを行っている図書館も登場しており、注目を集めている。

## (2) 参考事例

図書館によるブログ、メールマガジンなど情報発信の事例を付属資料1のリスト(C-2)にあげた。

## (3) 分析

図書館のHPが、たんに所在地図を掲載してあつたりするだけでは、観光との融合はあまり考えにくい。しかし、自館の所蔵する地域資料を積極的にアピールしたり、行事への参加を呼びかけたり、ボランティアなどの活動状況をHPで報告するということを、「地域情報の発信」という視点から見直すと、観光との融合がみえてくる。額賀(2008)は、観光における地域間競争の核心を「旅行者の誘致」であるとしたうえで、自治体が十分に観光を意識し、外に向けて情報発信を充実させることの重要性を説いているが、図書館のHPもそうした観点からとらえなおす必要があるだろう。その場合、従来の紙媒体による広報の延長としてみるのではなく、インターネットならではの工夫を行い、コンテンツにバラエティを持たせ、更新を適度に行い、ユニークな内容を盛り込むことが、閲覧者を増やすことになる。そしてその結果、その地域への関心が高まり、訪問動機につながる事が期待できるのである。

これまで図書館が蓄積してきた様々な地域資料などは、図書館でなければ提供し得ない貴重な情報を多く含んでいるので、そうした情報をインターネットで公開することによって、地域の文化や歴史をアピールすることになる。

図書館は地域情報の発信拠点といわれているが、インターネット上においても、そうした役割を意識することが必要である。インターネットの発達により、昨今では「その土地について知りたい」と思った時には自治体のHPや観光協会のHPがチェックされることが多いが、そこでチェックするHPのひとつに地域の図書館も含まれるように、図書館もコンテンツの充実に努めるべきである。

また、情報発信の手段として、HP、ブログ、メールマガジンなど様々なインターネット上の手法を工夫し、さらには携帯電話や情報ツールなどとの連携も検討していくことで、観光者がよりアクセスしやすい地域情報の提供が可能となるだろう<sup>(36)</sup>。

「ACADEMIC RESOURCE GUIDE」というHPを運営し、図書館界に対して様々な提言を行っている岡本真は、第17回京都図書館大会で「いま図書館に求められる新たなウェブ活用戦略」と

題する講演を行い、図書館がインターネットをより有効に活用して、図書館の存在感を高めるべきだと指摘した。その際、観光支援に図書館が貢献する可能性をひとつの試論として示し、図書館が自らをコンテンツプロバイダーとして意識し、観光に関連した様々な情報を組み合わせて提供することによって、新たな価値を生み出すことに図書館がもっと熱心になるべきだとした。またその際、図書館からの目線・論理ではなく、利用者を主体とする考え方こそがこれからの図書館の情報発信に必要だとも指摘した<sup>(37)</sup>。岡本の講演は、「図書館の情報発信、図書館によるインターネットの活用」という点に主眼が置かれたものではあるが、観光と図書館の融合のひとつの理想型として重要な示唆を含んでいるといえる。

#### **(4) 備考**

インターネットでの情報発信や広報活動にあたっては検討すべき課題も多い。まず、作業を外注するか館内スタッフで行うかという問題がある。予算状況が厳しいなかでの外注はなかなか難しいだろう。しかし館内で行うとなると、担当スタッフはインターネット関連の技術やデザインテクニックなどをひとつとおろし習得しなければならない。

またコンテンツの確保や更新などの作業にも(内部で行うにせよ外注するにせよ)相当の負荷がかかる。また、地域系情報は自治体の広報担当部署が、観光系情報は観光担当部署や観光関連の団体などが、それぞれHPを運営していることも多いので、どのような情報発信を図書館が行うかなどについて、関連部署との連携や調整が必要になる。内容のバランス面でも、地域内と地域外へ提供される情報の情報量の配分などを検討しなければならない。

### **(C-3) ネットコミュニティの影響**

#### **(1) 説明**

これまで、「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」、「情報発信の多様化(C-2)」という観点で観光との融合の可能性を考察してきたが、より広い観点で、インターネット社会の発展が図書館に影響を与えることがあるのかについて考察してみよう。

インターネットの発達に伴い、観光は様々な影響を受けているといわれる。例えば交通機関や宿泊施設の予約が簡単になったり、口コミ情報による評価が広まったり、非常にマニアックな観光行動に注目が集まるなどである。

図書館も様々なブログで話題としてとりあげられたり、インターネット上のコミュニティでテーマと

なったりして、図書館に関する情報交換が行われている。また図書館員や図書館学研究者のブログも多く存在し、それによって図書館の動向が詳しくわかったり、専門的な知識を得られる機会も増えている。

## (2) 参考事例

図書館に関連するHPやブログ、図書館系サイトなどを付属資料1のリスト(C-3)にあげた。

## (3) 分析

以前であれば、「この図書館に行ってきた」とか「あその図書館はおもしろい」といった情報を広く交換しあうことはなかなかできなかったが、インターネットの発達により簡単に情報交換ができるようになった。また、こうした影響を受けて、「自分の住んでいる地域以外の図書館を訪問してみるのも面白そうだ」と関心を持つ人が増えることも考えられる。さらには、図書館を訪問対象とするSIT的なHPも存在し、そうしたHPを見た人が「図書館も観光の対象になりうる」ということに気づくようになり、新たな「図書館ファン」を生む可能性もある。このようにインターネットの発達によって、図書館が観光対象になる可能性が高まったと考えられる。

また、直接訪問するまでに至らないとしても、図書館に関する様々な情報がインターネット上で増えていけば、個性ある図書館についての情報を通して、その図書館が設置された地域への関心が高まることも考えられる。そうした関心を、図書館自身がHPや情報発信を工夫するなどによってうまくフォローすることができれば、地域の認知度を高めたり観光に結びつけられる可能性もあるだろう。

「どことこの図書館に行ったら、観光の役にたった」、「図書館で親切にしてもらった」、「図書館で地元住民と交流した」という情報がインターネットで簡単にアップされ、多くのユーザがそれを参照する時代であることを、図書館も改めて意識すべきである。

## (D) その他

ここまで、「図書館の基本的な要素との関連(分類A)」、「地域社会との関連(分類B)」、「インターネットの発達との関連(分類C)」という観点で考察を進めてきたが、最後に、これまでの項目には分類しにくいものについて考察する。

## (D-1) 図書館への視察・見学

### (1) 説明

一般的に「視察・見学」の対象としては、ユニークな施設や工場などがイメージされるが、図書館が視察や見学の対象になることはあるだろうか。調査をしてみると、図書館は意外にも視察や見学の対象になっている。

主な視察目的としては、①運営方法やサービスの内容に特徴があったり、まちづくりに貢献している事例として知られている場合、②図書館の設計や構造に特徴があって、建築物として見学される場合、があげられる。①では議員、行政担当者、経済団体、大学や研究機関、NPO関係者、マスコミ、一般市民らが主な参加者であり、②では建築科の教師・学生らが主な参加者となる。

①の場合、視察の対象になる図書館は、新聞や雑誌の報道、あるいは専門雑誌などによって活動が紹介されたことがきっかけとなるほか、日本図書館協会による「日本図書館協会建築賞」の受賞や、「NPO法人 IRI知的資源イニシアティブ」による「Library of the year」の受賞なども注目を集めるきっかけとなる。

②について補足すると、建築や設計を学ぶ学部・学科では、設計課題や卒業研究に図書館や博物館などの公共施設がテーマとしてしばしばとりあげられる。特に図書館は、書架、読書スペース、貸出受付、書庫など固有の設計要素を持っているので、建物を見学するだけでなく、利用者や図書館員に取材して実際の使い勝手などを確認することも必要になる。建築やデザインに関わる者は、図書館をそういう関心から見学に行く。また、図書館学の科目にも「図書館建築論」という学問分野がある。

### (2) 参考事例

例えば、浦安市立図書館では平成19年(2007年)度実績で、全国各地および海外から、109件(493名)の視察、取材6件があった(『浦安市立図書館概要 平成20年度』より)。函館市立中央図書館では平成20年(2008年)度実績で、24件(413名)の視察・見学があった(『函館市の図書館2009』より)。

また図書館アンケートの結果でも、視察が「よくある」「ときどきある」を合わせて全体の72%ほどあり、予想外に視察が活発に行われていることがわかった。

付属資料1のリスト(D-1)に関連情報をあげた。

### (3) 分析

視察や見学は、2つの点で重要である。

1点目は、図書館と視察者との間で交流が行われるという点である。視察を受け入れることによって人脈が広がり、視察後でも、例えば図書館が新たなサービスを開始した時や「市制〇〇年記念行事」を行う際などに案内をするなど、様々な点で人脈を地域振興に活かすことができる。

2点目は、視察の際に併せて他の施設も視察したり、あるいは特産品の紹介や宿泊施設の利用などといった副次的効果が期待できる点である。図書館への視察をそれだけで完結させてしまうのではなく、視察者に地域全体への関心を持たせる機会であることを認識し、行政当局や観光協会などと連携して対応にあたることも検討されるべきである。

図書館自身も視察者が多く訪問すれば、自館に誇りを持つようになり、また視察者の意見や感想をふまえてさらに活動が活発になるだろう。これは地域全体にとってもプラスの効果をもたらす。

## (D-2) 図書館とツアー

### (1) 説明

前項で、図書館が視察や見学対象になっていることを述べたが、他にも図書館がツアーの対象になったり、あるいは図書館自身がツアーの主催者となる事例がないかを調査したところ、様々な事例があることがわかった。博物館や美術館でガイド付き館内ツアーが実施されたり、水族館などでナイトツアーが行われるなど、社会教育施設でも様々なツアーへの取り組みがみられるようになってきたが、図書館でも様々なツアーが行われているということは、あまり知られていないように思われる。

### (2) 参考事例

図書館とツアーの関連について、例えば以下などの参考事例がある。また、付属資料1のリスト(D-2)にも関連情報をあげた。

#### ① 図書館ツアー

図書館が見学対象となるもの。この場合、図書館全体をガイド的に案内するものや、ふだん利用者が見ることができない書庫などを特別に見せる「バックヤードツアー」などがある。例えば愛知県図書館では、「小中学生向けツアー」や「一般向けイブニングツアー」といった「図

書館探検ツアー」をしばしば開催している。

## ②図書館によるツアー

図書館がツアーの主催者となるもの。あるいは、図書館の応援組織である「友の会」などが主催するものもこれに準じるといえる。例えば小松市立図書館友の会では、ほぼ毎年バスツアーを行い、社会教育施設の見学をしたりして、会員同士の親睦を図っている。

## ③選書ツアー

図書館員が選書を行うのではなく、「“図書館の本を選んでみたい人”を市民から公募し、彼らを図書館が書店などに連れていき、そこで本を選んでもらう」という方法を実施した図書館があり、これを「選書ツアー」という。「選書ツアー」はこれまで北広島市図書館や大学図書館の一部などで行われたことがあるが、「本を誰が選ぶのが妥当であるか」という点などで議論も呼んでいる。

## ④その他

ツアーではないが、「スタンプラリー」のような方式により、図書館に親しみを持ってもらったり図書館への訪問や図書の貸し出しを促進するという試みが行われている。市内の分館を巡るものや館内の本棚にカードが隠されていてそれを探すもの、本を借りる度にスタンプを押すものなど様々な形態がみられる。例えば、伊万里市民図書館の事例(平成20年10月～平成21年2月末)では、「本を借りて、応募用紙にスタンプを押印→スタンプが30個たまると、抽選により記念品(図書カード)がもらえる」という方式で、これは県による「図書館先進県づくり推進事業」の一環として行われている。

## (3) 分析

観光と図書館の融合の可能性について考察する際に、上記であげたような事例は、図書館の側から観光へのアプローチという点で、他の項目にない独特な意味を持っている。

今後、図書館が新たなサービスの展開や地域貢献のあり方を模索していくなかで、図書館がどのような積極性を発揮していくかが、ひとつのポイントであると考えられるが、そうした「積極性」という観点で観光と図書館の融合を考えたとき、図書館自身がツアーを企画したり、図書館への訪問を何らかのインセンティブによって促進するという発想は、大きな可能性を秘めている。すなわ

ちこれは、「地域主導型の観光」という表現になぞらえていえば、「図書館主導型の観光」ということでもある。

特に図書館が主催するツアーについて考えてみると、「図書館の楽しさや有効性をアピールする」、「所蔵資料と実際の観光資源を結びつける」、「文化交流のためのきっかけとする」など、様々な目的やプランを設定できるし、対象も地域住民、地域外という区分のみならず、例えば児童、高齢者、障害者、外国人といったグルーピングを想定することができる。また実施にあたっては、例えばNPO団体や市民サークルなどに運営をまかせて、図書館はツアーのバックアップ(資料提供など)に重点を置くという方法も考えられる。「図書館主導型」とはいつでも、図書館がツアーのイニシアチブを握るという意味ではなく、「図書館の機能を有効に活用したツアー」と柔軟に考えてみる必要がある。

### 3 観光に関連した取り組みを行っている図書館の事例

#### 3-1 説明

「観光と図書館の融合」という発想ではないが、観光に関連した取り組みを行っている図書館がいくつか存在する。その中から、観光地域の中に立地し、平素から観光者への対応を行っている図書館として草津町立図書館を選び、また、観光系の展示などを積極的に行っている図書館として、鳥取県立図書館、高知県立図書館の2館に注目し、アンケートにより質問を行った。

観光と図書館の融合を実践していく際に参考になる点も多いと思われるので、その回答の要点をまとめつつ分析を行った。

#### 3-2 各館の状況

##### ●鳥取県立図書館

住所:鳥取市尚徳町101/竣工:1990年3月/蔵書冊数:843千冊

回答者:支援協力課くらし・産業支援担当蟻坂様

[概要]

- ・片山善博知事の時代に県全体で積極的な図書館改革が進められ、県立図書館もビジネス支援や地域活性化などへの取り組みが盛んになった。そうした様々な取り組みのひとつとして、図書館が持つ「情報発信力」の価値に着目して、観光展示に関する活動が展開されている。
- ・主な活動に以下などがあるが、複数の館で企画を相互に交換するかたちで行われている点が興味深い。
  - ー津山市立図書館で「忘れられない夏～とっとり県の海、鳥取県の夏～」観光案内展示(2008年7月17～8月8日)
  - ー鳥取県立図書館で「ぶらっと高知、おもいっきり高知、やっぱり高知」観光案内展示(2008年10月1～31日)
  - ー高知県立図書館で「鳥取千年往来」文化・観光紹介展示(2008年12月2～27日)
  - ー徳島県立図書館で「雪のある風景を楽しむ! 鳥取県の冬景色」展示(2009年1月6～25日)
  - ー鳥取県立図書館で「津山市の観光」展(2009年3月)、「徳島県観光展示」(2009年7月)等
  - ー「山陰の魅力大発見～食のみやこ・鳥取で大自然とマンガ文化にふれる旅～」(観光ポスターやパンフの展示配布。県内の物産の紹介などを交換展示。/2009年6～7月にかけて福

山市中央図書館、広島市立中央図書館、はつかいち市民図書館、岩国市中央図書館等で実施)

ーまた、山陽小野田市立図書館との交流がきっかけとなり、同館に「鳥取県と出会うコーナー」が設置されている。(2009年2月)

## ●高知県立図書館

住所:高知市丸ノ内1-1-10/竣工:1973年8月/蔵書冊数:520千冊

アンケート回答者:利用サービス担当チーフ山重様

[概要]

- ・予算状況が厳しい状況にあって、図書館行政のあり方について見直しが進められており、「情報提供機関」としての機能についても様々な試みが進められつつある。そのなかで図書館1Fの展示用スペースを「情報発信の場」として有効に活用するための発想として「観光」に着目した。
- ・観光に関する交換展を積極的に展開しており、平成21年(2009年)度では以下などが行われた。
  - ー「新宿・漱石・寅彦展 ～高知・新宿観光展示エキスチェンジ～」(6月3日～8月27日)
  - ー「いざ鎌倉！ ～高知・鎌倉観光展示エキスチェンジ～」(9月12～11月29日)
  - ー「龍馬が最後に訊ねた地、福井 ～高知・福井観光エキスチェンジ～」(12月2～27日)

## ●草津町立図書館

住所:吾妻郡草津町大字草津28/竣工:1988年11月/蔵書冊数:42千冊

アンケート回答者:中沢様

[概要]

- ・「心の湯治を@あなたの図書館で」をキャッチフレーズに、平素から観光者もサービス対象として活動しており、利用登録者全体の4割が町外者である。
  - ・「観光・温泉を知るためのブックリスト」を作成したり、観光マップ・観光パンフなども配備して、観光案内所的な役割も担っている。
  - ・図書館が地域住民以外の利用者にも親しまれている様子が、同地域のリゾートマンション所有者に国土交通省が行ったアンケートの回答から知ることができる。(回答例:「草津の滞在中に図書館が利用できてよい」「図書館の受付の方々が親切」など)
- (国土交通省住宅局, 2008, 別荘・リゾートマンション定住団塊世代の参加による高原都市の

### 3-3 アンケートの回答および分析

以下、アンケートの回答とそれをふまえた分析を述べる。(具体的な回答については付属資料3を参照。また館名は、それぞれ「鳥取」「高知」「草津」と略した。)

#### [問1:観光に着目するきっかけについて]

「厳しい財政状況のなかで、図書館の特長を活かせる活動として」(高知)、「図書館の受身的なイメージを打破するため」(鳥取)、「もともと町全体が観光で成り立っていることから」(草津)と、きっかけはそれぞれ異なっているが、高知と鳥取からは新しい試みにチャレンジして図書館の新たな可能性をひらこうという意気込みが感じられる。

また草津の場合は、もともと観光者の利用が多いため、新たな試みということではないが、はっきりとした使命感をもって、観光者に対応している様子が見えてくる。

#### [問2:地域住民への奉仕と観光者への奉仕のバランスについて]

高知および鳥取は、展示などによる周知活動が主であるため、今のところ奉仕のバランスを気にするまでには至っていない。一方、草津は観光者の利用が日常化しているが、図書館はこれを歓迎しており、町民も迷惑に思う様子はないとのことで、職員と町民の意識が一致している様子が見えてくる。

図書館アンケートでは、「観光シーズンになるとトイレの利用が増える」「駅に隣接しているので観光案内所的な問い合わせもある」といった回答もあり、立地条件などによっては、本来の図書館業務に支障を招きかねない状況も見えてくる。「今後、観光者の利用が増えて支障が出るようであれば、利用上の注意事項などを整備する必要がある」(鳥取)という回答をみると、図書館によっては「観光者への対応マニュアル」などを整備する必要があるかもしれない。

#### [問3:観光に関する活動の評価について]

「効果の検証は行っていない」(草津)、「効果の測定や評価をどうするかは課題である」(鳥取)と回答にあるように、観光に関する活動を行った場合、それが例えば観光者の増加などにどのような効果をあげたかを具体的に判定することは難しいと思われる。

数値的な測定が難しいのであれば、利用者へのアンケートやヒヤリングの中から次の活動のヒントを探したり、地域内外の連携を深めるといった質的な面に目を向けて、活動の方向性を探るのがいいのではないだろうか。

#### [問4: 行政当局や市民などのからの反応について]

高知や鳥取の回答をみると、観光に関する活動は概ね好評を得ている様子が感じられる。また、草津の場合は「特に反応はない」とあるが、これは活動が十分に浸透していることの現れであると思われる。

ただし「ごく一部」としながらも「なぜ他地域の情報を展示するのかという様子もみられた」(高知)とあるように、他地域の観光展示を相互に行う際などには、イベントの背景を説明するなどの配慮が必要な場合もあるのではと思われる。

#### [問5: 観光者が多く来館することによる懸念について]

いずれの館も基本的には特に懸念を感じてはいない。もちろん「集団での利用や館内案内を希望する場合は事前に申し込みをしていただく」(鳥取)とあるように、見学などのために団体訪問に対応する場合は、それなりの配慮が必要になるだろう。

宿泊施設や観光施設においては、「旅の恥はかき捨て」的な行為もおこりやすいだろうが、図書館の場合は、観光者が特別にマナー違反をおこしやすいということは考えにくいと思われる。

#### [問6: 「観光者と地域とのコミュニケーションモデル」に対する感想について]

→これについては第4章で紹介した。

#### [問7: これまでの活動をふまえての意見などについて]

「期待が高まると負担も増えてしまい、手軽な方法を考える必要がある」(高知)、「先方の図書館を訪問して展示を行うと、館内業務が手薄になる」(鳥取)という回答からは、観光に関連した活動を行う際に、他の業務とのバランスや人員の配置などについて検討すべき事項が多いことがわかれる。「観光」をテーマにした活動は図書館で比較的なじみが薄いので、どのような業務がどの程度の量で発生するかの見通しを立てにくいという事情もあると思われる。

また、「司書はもっと自分の町のPRをすべきである」(草津)という回答からは、これまで長年に渡って、観光者に対応してきた自負が感じられた。さらに「発信が足りないと思う」(草津)というコメ

ントは、観光との関連だけではなく、広く図書館全体の課題として受け止められてよいと思われる。

### 3-4 全体的なコメント

上記の「観光に関連した取り組みを行っている図書館へのアンケート」をふまえると、観光と図書館の融合を考えるにあたって、留意すべきポイントが2点ほどみえてくる。

まず1点目は、図書館による自己の可能性に対する意識である。

図書館の役割を限定的固定的にとらえるのではなく、「図書館が置かれた地域、および図書館自身の状況をふまえると、どういう活動ができるか」という問いかけにより、新たな可能性へのアプローチを積極的に模索していくオープンな意識が必要だと思われた。

なお厳密に言えば、草津町立図書館の場合は「新たな可能性」とはいえないが、自らの立地条件や利用者像を常に認識しており、他の図書館にはみられない独自のポリシーによって運営されているという意味で、自己の可能性に対する意識の高さをうかがうことができる。

2点目は、活動評価の難しさの問題である。

これまでの図書館活動では「貸出冊数」や「登録者数」といった数値が重視される傾向にあったが、昨今注目を集めている新たなサービスでは、そうした旧来のような「数値による評価」がしにくいものも多くみられる。さらに、本論で考察している「観光と図書館の融合」となると、その図書館の奉仕対象地域外への効果も考慮しなければならず、いっそう評価が難しくなる。

そうした困難さがあるにせよ、今後、観光と図書館の融合を進めていく場合には、例えば「図書館がいかに関地域文化の保存に貢献しているか」、「地域内外の交流をどのようにもたらしているか」などの点について、なんらかの方法によって評価を行うことが必要になるだろう。

なお上記3館の他にも、観光を意識した取り組みを行っている図書館には、奈良県立図書館情報館、千代田区立千代田図書館、津山市立図書館などがある。こうした図書館の活動は図書館系の文献で紹介されることはあるが、観光学系の文献で紹介されることがほとんどないため、観光学の観点からの分析が今後必要である。

## 4 本章のまとめ

### 4-1 まとめおよびメリット等についての考察

以上、図書館に関する様々な要素について、(A)図書館の基本的な要素との関連、(B)地域社会との関連、(C)インターネットの発達との関連、(D)その他、に分類して、観光との融合の可能性を具体的に考察した。実際の現場においては、各館の事情により現実的には対応が難しい提案なども含まれていると思われるが、ここではできるだけ広い観点に立って検討を行った。「観光と図書館の融合」という表現をみると「図書館へ観光に行くこと」というイメージを強く与えるかもしれないが、実に様々な連携の可能性があることが、本章の考察から浮かび上がってきた。

今後、「観光と図書館の融合」の実践にあたっては、本章であげた各要素を個々に着目してもよいし、複数を組合せることも考えられる。また、観光や図書館、あるいは社会の変化などに伴い、ここであげられていない新たな要素や可能性が今後出現することも十分にありうる。

本章で述べた各要素の典型的な活用方法をふまえて、「観光と図書館の融合」によってもたらされるメリットを、「観光者」、「図書館」、「地域」のそれぞれについて簡単にまとめると以下となる。

#### ①観光者にとってのメリット

図書館を利用することで地域に関する様々な情報が得られる。図書館員に地域のことを質問したり、図書館で行われる地域に関連した展示を観て学習したり、イベントに参加して地域との交流を広げることができる。また、地域情報のみならず観光中に疑問に思ったことの解決にも図書館の蔵書は役立つし、観光中の息抜きスポットとしても利用できる。

また、観光中だけの利用に限らず、事前に訪問先のことを問い合わせたり、事後に交流を発展させるなどのきっかけを与えてくれる。

#### ②図書館にとってのメリット

観光者の利用を意識することで、活動の幅を広げ、地域内外の交流の場としても機能できる。また様々な機関や団体と連携して情報を提供したり、イベントを行ったり、HPのコンテンツを充実させるなどにより、情報発信の拠点として存在感を示す。活発な活動や独創的なサービスを行うことにより、視察を迎えて地域への関心を高めることもできる。これらによって地域貢献をはたす。

### ③地域にとってのメリット

図書館を通じて観光者に地域の様々な情報を提供できる。また、図書館の持つ資料を活用したり、図書館が行っている課題解決型サービスのサポートを受けるなどして、まちづくりや観光振興と図書館を連携させて地域を活性化し、地域の魅力を高めることができる。

なお、デメリットについて考えてみると、観光者および地域にとっては、特にこれといったデメリットはなさそうに思われる。ただし、図書館にとっては、仕事が増えたり新たなサービスへの対応が必要となるし、場合によっては図書館が混雑したり騒がしくなるなどのデメリットが考えられる。もしこうしたデメリットが、従来からのサービスを大きく低下させたり、地域住民の利用をスポイルするようなことになるようであれば、それらと引き替えにしてまで、観光と図書館の融合を進めるのは望ましいことではない。

## 4-2 効果からみた考察

『観光実務ハンドブック』（日本観光協会編，2008，p.602）によれば「観光施設が提供する役割には、目的的作用と補助的作用がある」との説明がある。この説明を応用して、図書館が持つ効果を以下2点において考察してみよう。

①**集客効果**: 図書館に行くことが観光の目的になるもの。

②**補助効果**: 図書館にある資料や図書館が提供するサービスなどが、本来の観光目的に対して補助的な効果をもたらすもの。

まず「①集客効果」としては、「コレクション・文庫(A-1-3)」「イベント・行事(A-2-2)」「設計やデザインの効果(A-3-1)」「図書館への視察・見学(D-1)」が重要であると思われる。これらはいずれも図書館を訪問すること自体が観光動機となりうる。「図書館とツアー(D-2)」も(多少特殊な事例ではあるが)ここに含められる。

また「②補助効果」としては、「地域資料(A-1-1)」「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」「レファレンスサービス(A-2-1)」「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」「情報発信の多様化(C-2)」が重要であると思われる。観光者が訪問地のことをより深く知りたいと思った際に、これらはいずれも非常に役に立ち、観光体験をより豊かにしてくれる効果が期待できる。これらの考察を表3-2にまとめた。

表 3-2 効果からみた項目の仕分け

<p><b>①集客効果が強い項目</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>－コレクション・文庫(A-1-3)</li> <li>－イベント・行事(A-2-2)</li> <li>－設計やデザインの効果(A-3-1)</li> <li>－図書館への視察・見学(D-1)</li> <li>－図書館とツアー(D-2)</li> </ul> <p><b>②補助効果が強い項目</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>－地域資料(A-1-1)</li> <li>－地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)</li> <li>－レファレンス・サービス(A-2-1)</li> <li>－デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)</li> <li>－情報発信の多様化(C-2)</li> </ul>
--

なお、上記は典型的な効果についての分類であるが、実際には複合的な効果もたらされる点に留意が必要である。例えば、「地域資料(A-1-1)」「地域テーマに沿った蔵書(A-1-2)」は補助効果がメインであるが、地域のことに興味を強く持つようになれば、「地域資料を閲覧するために図書館に行く」ということが動機になることも考えられる。また「コレクション・文庫(A-1-3)」は集客効果があるが、すでにそのコレクションに関連した資料館などが地域に存在する場合は、それと連携することにより補助効果ももたらされる。また「イベント・行事(A-2-2)」は集客効果があるが、地域文化を知るための観光に対しては補助効果もある。また「様々なサービスとの関連(A-2-3)」「まちづくりとの連携(B-1)」などは、それ自体は集客効果も補助効果もあまりないが、図書館の活動を地域外にアピールすることによって視察や見学などを招けば、結果的にある種の集客効果をもたらすことになる。このように、基本的な効果以外に、観光者の意識や状況によっては別の効果を持ちうるということも意識しておくべきである。

さらに『観光実務ハンドブック』(前掲, p.607)では、博物館や美術館や民俗資料館が観光にはたす役割として「集客効果」と「文化発信効果」をあげている。この「文化発信効果」について考えてみると、図書館も地域の情報拠点として総体的に文化発信の機能を備えているし、特に昨今ではインターネットを通じての情報提供(「デジタル・アーカイブズによる情報提供(C-1)」、「情報発信の多様化(C-2)」)も、文化発信(あるいは地域情報の発信)として重要な役割を持っている。そしてこうした「文化発信効果」は、地域への関心を集めるという意味で「集客効果」を持ち、コンテンツの内容によっては「補助効果」ももたらすのである。

このように、「集客効果」「補助効果」「文化発信効果」という視点から各要素の特性をとらえ、その効果をより高めるための方策を検討することも、融合の実践にあたって必要である。

## 【補注】

- (1) この種別については、根本(1999)を参考にした。
- (2) この部分については、国立国会図書館(2007)などを参考にした。
- (3) 例えば岡崎・梅宮(2009, p.55)は、まちづくりを進めるうえで一般的な段階として、[知る]段階、[活かす]段階、[広げる]段階があるとして、「活動初期の[知る]段階では、まず住民が地域資源を認識、発掘することが必要である」と述べている。
- (4) 石田(2004)は、観光振興にあたって「郷土史家を発掘育成せよ」(p.184)と述べ、また「地元で郷土教育にもっと力を」(p.188)とも述べている。
- (5) 例えば八王子市中央図書館ではわらべうたをDVD化しているし、宇都宮市上河内図書館では民話をDVD化している。また、愛知川町立図書館では「町のこしカード」というシステムにより、市民らと協力して地域文化の収集を行っている。全国の図書館で、このような地域文化保存への取り組みがみられる。
- (6) 根本(1999, pp.45-46)では、地域資料は地域に存在する様々な機関や団体が発行するものがあるので、それらの機関や団体とこまめに接触し、連携を図ることによって、一般住民との仲介役あるいは交流の場として機能することが必要だと説明されている。
- (7) 大串(2008, p.247)は、「図書館は地域資料の積極的な提供を求め地域との連携を図り、地域住民の認知度を上げることで収集の確実性を高めることが今後の課題となる」と指摘する。
- (8) なお、ここでいう「地域テーマに沿った蔵書」は「地域資料」に含めて考えられることも多いが、本稿では内容の違いを明確にするため、地域で作成され、地域のことを主題にしている資料を「地域資料」とし、一般に流通している資料の中からテーマや内容が地域文化に関連を持つものを集めた場合を「地域テーマに沿った蔵書」として区別した。
- (9) 伊東(2008, p.36)は、「図書館を利用する最大の利点は、そこを通じて入手できる本の幅広さにある。特に公立図書館は、乳幼児から老人まで、年齢に関わりなくすべての住民を対象に整備されたサービスがおこなわれているところであり、いわば乳児向けの絵本から専門的な学術論文まで、どのような種類の本や文献でも入手して利用できるところに特徴がある」と述べて、図書館の多様性を強調している。
- (10) 例えば帯広市図書館で、小学生を対象にして「午前中に図書館で動物について調べ、その後動物園に移動して動物を観察する」という行事が開催された。(2009年7月29日)
- (11) 例えば以下などの事例がある。

- －竹田市にある「B・B・C長湯」には、山岳図書13,000冊を保有する図書館があり、長期滞在者へのアメニティを提供している。
  - －宮崎市の青島観光ホテル1階ロビーには「建築図書館」という図書コーナーがある。
  - －仙台市には「ライブラリーホテル東二番丁」、「ライブラリーホテル仙台駅前」というホテルあり、美術や建築系などの専門書が用意されている。
  - －奈良市のホテル日航奈良では、奈良県立図書情報館と連携して「千田稔(館長)が選ぶ20冊」というリストを用意し、宿泊者への図書の貸出サービスを行っている。
- (12) ボワイエ(2006, p.217)は、想像された旅行(事前)、現実の旅行、延長された旅行(思い出)という旅行における3つのフェーズに、それぞれ3種類の文学が対応すると述べている。また「紀行文学」というジャンルがあったり、「読書と旅」や「本との出会い」などをテーマとする文献が数多くみられることを考えると、観光体験と読書体験には「他者」「異文化」「学習」「交流」などにおいて様々な関連性があると考えられる。
- (13) 『図書館ハンドブック』(日本図書館協会, 2005, p.81)では「レファレンスサービス」とは「何らかの情報要求をもつ利用者に対して図書館員が行う人的援助である」と説明されている。
- (14) これに関連する事例として、鎌倉市図書館では修学旅行用に鎌倉市のことを紹介したビデオの貸し出しをしている。
- (15) 例えば千代田区立図書館では、「コンシェルジュ」というコーナーを設け、総合案内や図書館内のガイドツアーを行っているほか、「街案内」業務として、古書店を案内したり、地域のおすすめスポットやイベントの紹介なども行っている。
- (16) 旅の販促研究所(2009, pp.134-139)によれば、旅先で情報を得る方法として、観光案内所の利用は8割に達しているという調査結果があるとされているが、図書館で観光情報を得ようとする人がいるかどうかについてはまったくふれられておらず、図書館の認知度が低いことがうかがわれる。
- (17) 図書館がイベントなどを行う根拠は、図書館法の第3条6号に「読書会、研究会、鑑賞会、映写会、資料展示会などを主催し、及びその奨励を行うこと」とあるのに由来する。
- (18) 『社会教育調査(平成20年度中間報告)』(文部科学省, 2009)
- (19) 例えば兵庫県新温泉町では「ささゆり号」という移動図書館が、2007年から温泉地域へも巡回を行っている。
- (20) 図書館雑誌編集委員会「特集にあたって」, 図書館雑誌, 102(6), p.368
- (21) 葉袋秀樹(インタビュー) 地域を支えるこれからの図書館像, 開発こうほう, 2008年3月号,

pp.1-10)

※なお、同記事のなかでインタビュアーが「青森市では駅前に図書館ができたことにより、買い物ついでに図書館を利用する人が増えた」という主旨の発言もしている。

(22) こうした工夫は図書館が複合施設でない場合でも行うとよいと思われるが、複合施設の場合には移動の負担が少ないので、より実施しやすいといえる。

(23) 古池(2002, pp.81-90)は、「“駅”が街になる」という論考のなかで、駅の多機能性や駅が情報発信にはたす役割を考察している。

(24) 『日本の図書館 2008』(図書館協会, 2009)の統計によれば、年間開館日数が300日以上ある図書館は510館あり、さらに330日以上館も164館ある。また、閉館時間が19時以降の図書館は1115館あり、21時以降の館も58館ある。

(25) 例えば、草津町立図書館や新潟市立中央図書館は地元が作成したガイドマップに掲載されている。

(26) このことは図書館法第8条で規定されている。

(27) 高知県と鳥取県での観光に関する相互展示は、図書館同士の交流がそもそものきっかけであったという。

(28) この分析は、大串(2002)を参考にした。

(29) 『社会教育調査(平成20年度中間報告)』(文部科学省, 2009)

(30) 森(2000, p.140)は、「(図書館ボランティアは)他の人々の生涯学習を支援するために、自らの知識・技能を提供するものであることを明確にして活動を始めている。そして、他の人々に生涯学習を支援することによって、自らに刺激と活力を得、自らの知識・技能を維持し、一層高める必要から自らも生涯学習を継続する。図書館ボランティアはまさに生涯学習社会の重要な担い手である」と述べている。

(31) 塩見(1991, pp.193-194)の対談で、図書館員が選書をする際に、平素からの住民との交流が重要な役割をはたしている事例が語られている。

(32) これについては、大串夏身(2007)、バーゾール(1996)などで論考されている。

(33) 検索エンジンでのヒットやリンクなどのほかにインターネット上で存在を示すには、HPに記載したり、ブログで言及されるといった方法もある。従って、地域資料自体のデジタル化が難しいのであれば、「情報発信の多様化(C-2)」や「ネットコミュニティの影響(C-3)」であげたような工夫によって、「地域文化を知るのに貴重な資料が図書館にある」ということをうまくインターネット上でアピールする必要がある。

- (34) この箇所は、『別冊環(15)』(藤原書店, 2008)を参考にした。
- (35) 『日本の図書館 2007』(日本図書館協会, 2008)によれば、全国の図書館のうち、2365館(全体の約77%)がHPを開設している。
- (36) 旅の販促研究所(2009, p.66)によれば、自治体の観光地情報サイトにアクセスした経験のある人は8割以上いるという。
- (37) 第17回京都図書館大会実行委員会「第17回京都図書館大会記録集」(CD-ROM)より。実施日:2008年9月3日、場所:同志社大学寒梅館/ACACEMIC RESOURCE GUIDEのHP(<http://www.ne.jp/asahi/coffee/house/ARG/index.html>)(downloaded at 2009.12.15)